

# 三日市A遺跡1

2011

石川県野々市町教育委員会

みつ か いち  
三日市 A 遺跡 1

2011

石川県野々市町教育委員会



全景（上空から）



全景（北から）



SI6 ~ 14 (南から)



調査区と三日市集落（東から）

## 例　　言

- 1 本書は、三日市A遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、石川県石川郡野々市町字三日市町地内である。
- 3 調査原因は、野々市町北西部土地区画整理事業にともなうものである。
- 4 調査は、野々市町北西部土地区画整理組合からの依頼を受けて野々市町教育委員会が実施した。
- 5 調査にかかる費用は、野々市町北西部土地区画整理組合が負担した。
- 6 現地調査は平成20年度に実施した。遺跡名・期間・面積・担当者は以下のとおりである。  
期　間　　平成20年11月26日～平成21年1月23日  
面　積　　660m<sup>2</sup>  
担当者　　田村昌宏　野々市町教育委員会文化振興課 専門員
- 7 出土品整理は平成22年度に野々市町教育委員会が実施した。
- 8 報告書の刊行は平成22年度に野々市町教育委員会文化振興課が実施した。担当及び執筆・編集は田村昌宏（野々市町教育委員会文化振興課 専門員）が行った。
- 9 現地調査から出土品整理、報告書刊行に至るまでに、野々市町北西部土地区画整理組合、向井裕知の協力を得た。（敬称略）
- 10 本書についての凡例は以下のとおりである。
  - (1) 方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第VII系に準拠している。
  - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。
  - (3) 出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
  - (4) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
  - (5) 土層図の注記及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会事務局・財團法人 日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に従った。
  - (6) 調査区は現道をはさんで、北側と南側にわかれている。本報告では、北側調査区をA区、南側調査区をB区と呼称する。
  - (7) 遺構名称の略号は以下のとおりである。  
　　掘立柱建物：S B　　竪穴状遺構：S I　　井戸：S E　　土坑：S K　　溝：S D  
　　小穴：P
- 11 調査に関する記録と出土遺物は、野々市町教育委員会が一括して保管・管理している。

## 目 次

第1章 調査の経過 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 発掘作業の経過 .....	1
第3節 整理作業の経過 .....	2
第2章 遺跡の位置と環境 .....	2
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 調査の方法と成果 .....	5
第1節 調査の方法 .....	5
第2節 層序 .....	5
第3節 遺構 .....	5
第4節 遺物 .....	22
第4章 総括 .....	24
観察表 .....	32
写真図版 .....	

## 挿 図 目 次

第1図 調査区位置図 .....	1	第12図 SI、SK 土層断面図 .....	15
第2図 野々市町位置図 .....	2	第13図 SI、SK、SE 遺構図・土層断面図 .....	16
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 .....	4	第14図 SI、SK 遺構図・土層断面図 2 .....	17
第4図 調査区グリッド設定図 .....	5	第15図 SK、SD、P 遺構図・土層断面図 .....	20
第5図 SB1 遺構図 .....	6	第16図 土器、陶器実測図 .....	25
第6図 SB1 断面図 .....	7	第17図 土器、陶器、鉄製品、石製品実測図 .....	26
第7図 SB2 遺構図・断面図 .....	8	第18図 石製品実測図 1 .....	27
第8図 SB3 遺構図・断面図 .....	9	第19図 石製品実測図 2 .....	28
第9図 SB4 遺構図・断面図 .....	10	第20図 石製品実測図 3 .....	29
第10図 SI、SK 遺構図・土層断面図 1 .....	13	第21図 石製品実測図 4 .....	30
第11図 SI、SK 遺構図 .....	14	第22図 石製品実測図 5 .....	31

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表 .....	3	第3表 鉄製品観察表 .....	33
第2表 土器、陶器観察表 .....	32	第4表 石製品観察表 .....	33

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

三日市A遺跡発掘調査業務は、野々市町北西部土地区画整理地区49街区におけるケアホーム施設建設工事に伴う事業を調査原因とする。平成20年9月、野々市町北西部土地区画整理組合（以下、北西部組合と呼称する。）から野々市町教育委員会（以下、町教委と呼称する。）に、本地区内においてケアホーム施設建設の計画の打診があった。北西部土地区画整理地区49街区は、全域が埋蔵文化財包蔵地であったため、直ちに、組合と町教委との間で協議を行った。協議をした結果、本開発地のケアホーム施設建設予定地である660m<sup>2</sup>分は、埋蔵文化財に影響を及ぼす可能性が高いことから、発



第1図 調査区位置図 (S=1/2000)

掘調査を実施し、それ以外の箇所は、駐車場など盛上造成の工事の予定で、地下遺構に影響を及ぼさないことから、慎重な工事施工を実施してもらうことで合意した。続いて、施設建設予定地の埋蔵文化財発掘調査について協議を継続した。当該地における工事の着手については、遅くとも平成21年3月から開始したいという緊急性の高い計画であった。そのため、本格的な冬が訪れる前の、平成20年11月から12月までに現地の掘調査を完了して、工事の実施に影響を及ぼさないように配慮することとした。

また、出土品の整理や報告書の刊行については、平成22年度に実施することで合意した。

町教委は、平成20年11月11日付で、石川県教育委員会（以下、県教委と呼称する。）に埋蔵文化財包蔵地における土木工事取り扱いの届出を行い、同年11月13日に県教委から町教委にその通知が届いた。これを受けて、町教委は、本開発予定地発の埋蔵文化財発掘調査の具体的な作業に着手していった。

### 第2節 発掘作業の経過

平成20年11月7日、野々市町は本開発予定地における埋蔵文化財発掘調査の実施計画書を北西部組合に提出し、その計画書に基づいて、野々市町と北西部組合との間で委託契約を締結した。

現地調査は、11月26日より開始した。調査区の設定をした後、大型掘削機により遺構面までの土砂を掘削し、12月3日に完了した。12月8日からは、発掘作業員による人力作業が始まった。作業は、12月前半までは順調であったが、その後は、天候不順が続くと同時に、遺構密度の高さが想定以上であったことから、難航を極めた。結果、12月中旬に終了する予定であった発掘作業は、翌年1月後半まで実施することとなった。1月21日、遺構の掘削作業はすべて完了し、そのまま発掘調査地内の清掃作業を開始した。翌日の1月22日は、清掃作業を継続し、終了後、直ちにラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。翌23日には、完掘した遺構の個別写真撮影と、発掘調査器材等の整理及び搬出作業を経て、現地調査作業を終えた。

### 第3節 整理作業の経過

平成22年4月1日、野々市町は北西部組合に、現地調査で発見した出土品整理及び報告書刊行を目的とした実施計画書を提出し、その計画書に基づいて、両者との間で委託契約を締結した。

出土品整理は、洗浄作業から開始した。洗浄作業は4月15日と翌16日まで行った。4月26日からは記名・分類・接合作業に着手し、5月7日まで実施した。5月10日からは土器・石器などの実測を開始し、6月25日まで行った。その後、6月28日からは遺構図・遺物実測図のトレイス作業を行い、7月8日に終了した。平成23年1月からは、報告書の刊行作業を本格的に開始した。作業内容は、原稿執筆、図版作成、出土品の写真撮影、報告書の編集・校正で、3月30日までにこれらの作業を終えた。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

野々市町は石川県のほぼ中央、石川平野の要地に位置する。町の大きさは南北約6.7km、東西4.5kmで、県内で最も面積の小さい自治体である。町域は靈峰白山を源とする県下第一級河川手取川によって形成された手取川扇状地の北東部にあたり、扇尖部と扇端部の狭間に位置する。本町で最も高い標高地は50m、最も低い地点は10mで、なだらかな緩斜面となる地勢をみせているが、視覚上では平坦面が続いているように見える。

このように、現在の野々市町は平坦な地形が広がっているが、従前は手取川から派生する多くの小河川によって形成された微高地と微低地が混在する地形であった。これが、稲作が伝わる弥生時代より、石川平野でも水田耕作が積極的に営まれるようになり、町域においても時代が下るとともに、凸凹の多い土地は少しずつ耕作地として生まれ変わっていった。明治時代以降は、田区改正による耕地整理が各地で急速に広がり、それ以降、町は現在見られるように、全域平坦な地形へと移り変わり、昭和30年代までは、稲作農業が主産業となっていた。

しかし、昭和40年代の高度経成長期以降は、県庁所在地金沢市の隣接した町という地理的条件から、住宅地や商業施設の開発が著しくなり、水田風景は急速に見られなくなった。特に、北部の御経塚地区や南部の三納・栗田・新庄地区は大型スーパーなどの立地が相次いだことで、金沢市郊外の小売業の中心地となっていました。今回、調査箇所となる町域北西部地区も、大きく変貌を遂げていくと思われる。また、町の東部には金沢工業大学、南部には石川県立大学といった教育機関が多くおかれ、若者が多く集う学園町としての性格も持ち合わせている。

今回の調査地である三日市A遺跡は、標高約17mで、手取川から派生するによって形成された微高地に立地する。ただし、町域上流部と比較して、大きな川原石の堆積は少なく、微低地との高低差も大きくなることから、当時の生活拠点の場としては、非常に適した地であるといえよう。



第2図 野々市町位置図

### 第2節 歴史的環境

三日市A遺跡周辺の遺跡を中心として、時代別に概観する。

#### 縄文時代

本遺跡より北方約1km離れたところには国指定史跡となっている御経塚遺跡(6)が所在する。御経塚遺跡は、縄文時代後期～晩期にかけて営まれた地域における拠点集落の跡である。御経塚遺跡の近隣には、新保本町チカモリ遺跡(1)や中屋サワ遺跡(2)など、出村的な集落が所在する。これらの地域は、標高6～10mに立地し、扇状地を伏流する地下水の湧水域であった。また、当時の生活に必要な落葉広葉樹と照葉樹が混在する豊かな林野が大きく広がっていた場所でもあった。このことから、この地域一帯は、古くは縄文時代から人々の営みが形成されていったようである。

本遺跡より南東約2kmのところには、縄文時代晚期の長竹遺跡（17）がある。長竹遺跡は縄文晚期後半の基準資料となる土器が出土した遺跡で、水田稻作農耕が西日本に波及した極めて重要な時期である。三日市A遺跡と御経塚遺跡からは、当該時期の稻作の圧痕のついた土器が出土している。

#### 弥生時代

手取川扇状地一帯における弥生時代の遺跡分布を見ると、前期～中期にかけては少なく、後期に数多く存在する。御経塚遺跡（ツカダ地区）、乾遺跡（15）からは、柴山出村式と呼ばれる弥生時代前期の土器が確認されているが、この時期は弥生文化の波及が十分ではなく、まだ縄文時代の影響が強く残っていたようである。

弥生時代後期になると、鉄器の普及などを要因とする生産力の向上から人口が増え、それに伴い、手取川扇状地一帯各地に集落が展開するようになる。本遺跡をはじめ、周辺にある御経塚シンデン遺跡（5）、御経塚遺跡、長池ニシタンボ遺跡（7）、二日市イシバチ遺跡（9）、郷クボタ遺跡（10）、三日市ヒガシタンボ遺跡（13）、徳丸ジョウジャダ遺跡（14）などからは、竪穴建物や掘立柱建物などで構成される集落跡が見つかっている。これは、農耕社会が急速に広がったことから、安定した農耕地の確保が必要となったため、広範にわたってムラが形成していったと考えられる。

#### 古墳時代

古墳時代前半については、御経塚シンデン遺跡や二日市イシバチ遺跡など、弥生時代後期からの流れを汲む集落跡を確認することができるが、扇状地上での集落数は一旦収束傾向となる。なお、御経塚シンデン遺跡では、弥生集落廃絶後に、15基の前方後方墳、方墳からなる大古墳群を造立している。

古墳時代後半になると、本遺跡より約5km上流の手取川扇状地扇央部に後期古墳が築かれるようになる。古代

7世紀後半には、手取川扇状地扇央部に、県内最古の古代寺院である末松庵寺が建立される。末松庵寺跡は、東に塔、西に金堂が置かれた法起寺式の伽藍配置をもち、この時期以降、藤平田ナカシンギジ遺跡（18）など周辺各地に集落が増大していく。また、手取川扇状地扇端部には、初期莊園の遺跡である横江莊々家跡（3）、上荒屋遺跡（4）が所在する。また、本調査区の南方100mには、9世紀頃に成立した古代の官道である北陸道の跡が見つかり、上記莊園遺跡との関係について指摘されている。

#### 中世

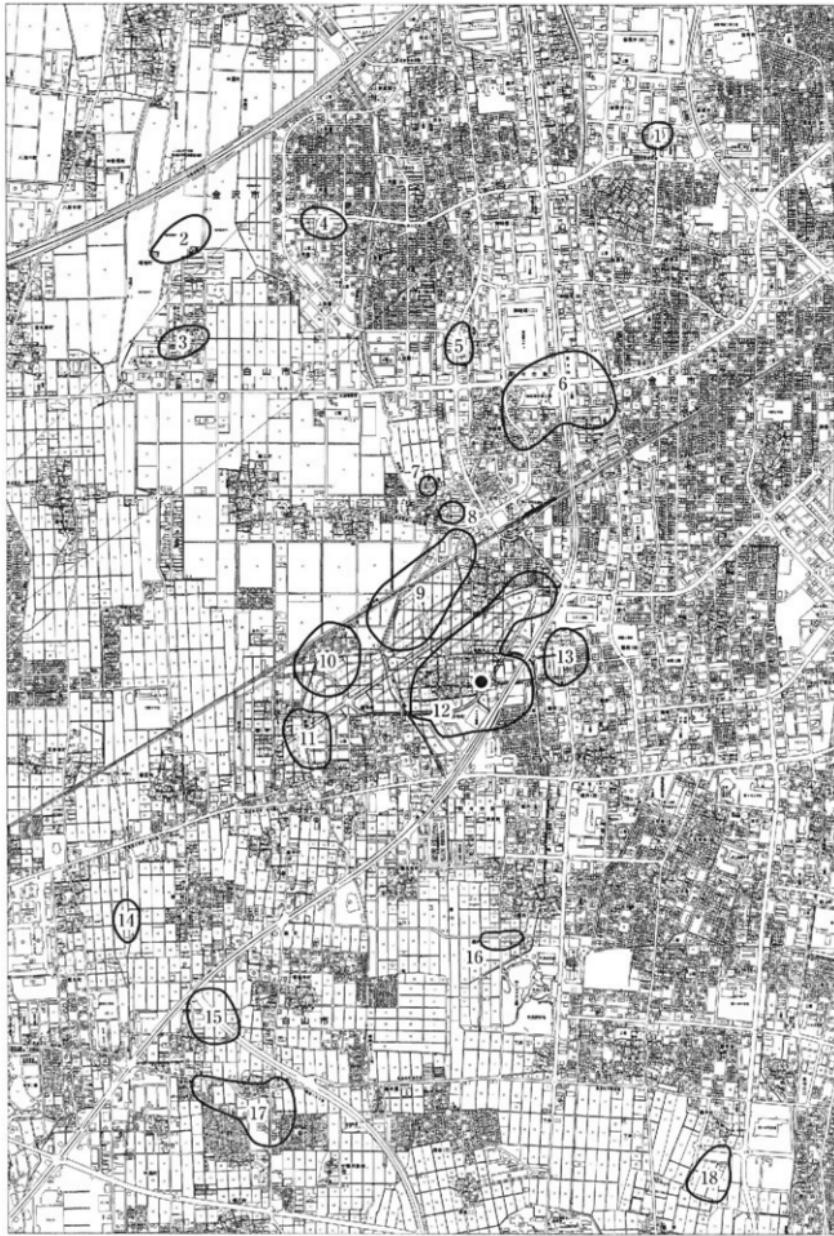
11世紀後半～12世紀頃から、在地領主層の武士団の形成がはかられるようになった。地元武士團である林氏や富樫氏は、手取川扇状地での新開発や再開発に大きな影響を与えた。ただし、現在のところ町域内で中世前半にあたる12～13世紀にかけての遺跡は多く確認されていない。中世の遺跡が多く認められるようになるのは、富樫氏が加賀国守護職に任命され、野市に守護所を置く14世紀頃からである。本遺跡をはじめ、近隣の二日市イシバチ遺跡や郷クボタ遺跡、中屋サワ遺跡では、溝で囲まれた中に建物などが配置される散居村のような景観が広がる集落が營まれた。また、堀内館跡（16）では、幅1.5m、深さ1mほどの大きな堀で囲まれた屋敷地の跡も確認されている。15世紀以降の集落遺跡である長池キタノハシ遺跡（8）や徳用クヤダ遺跡（11）では、小規模な家並みが密集した村落形態を呈し、散村から集村へと大きく変わる様相となる。なお、本調査区から西方約200mの遺跡内からも同様な集落跡を確認している。

#### 近世

現在県内で見ることができる集落の多くは、近世に成立したと考えられる。御経塚集落内や郷町集落の近隣地での発掘調査でも、近世の造構・遺物を発見している。また、乾遺跡や、本調査区から南方30mの集落外れからは、当該時期の墓跡を確認している。

番号	遺跡名	種別	時代
1	新保本町ナミリ遺跡	集落跡	縄文
2	中野サワ遺跡	集落跡	縄文～中世
3	猿田久々家跡	丘陵跡	古代
4	上荒屋遺跡	集落跡	庄園跡
5	御経塚シンデン遺跡	集落跡	古墳
	御経塚シンデン古墳群		
6	御経塚遺跡	集落跡	縄文～中世
7	長池ニシタンボ遺跡	集落跡	弥生
8	長池キタノハシ遺跡	集落跡	中世
9	二日市イシバチ遺跡	集落跡	縄文 弥生 中世
10	郷クボタ遺跡	集落跡	古代 中世
11	徳用クヤダ遺跡	集落跡	古代 中世
12	三日市A道跡	道路跡	弥生 古代 中世
13	三日市ヒガシタンボ遺跡	集落跡	弥生 古代 中世
14	徳丸ジョウジャダ遺跡	集落跡	弥生 古代
15	乾跡	集落跡	古墳
16	配内館跡	台跡	中世
17	高石遺跡	集落跡	縄文
18	藤平田ナカシンギジ遺跡	集落跡	中世

第1表 周辺の遺跡一覧表



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/20000)

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

調査は、まず大型掘削機による表土の除去作業からはじめた。重機による掘削は、遺構面手前までとし、重機掘削完了後には、人力による掘削作業を開始した。人力による作業は、南側のB区から開始した。遺構面の検出をした後、遺構の地点を明確にするため、遺構略図を作成し、それと同時に遺構の掘削作業を実施した。主要遺構や遺物が出土したものについては、記録図をとってから完掘した。B区の作業が一段落した後、直ちに北側のA区の作業にとりかかった。A区の調査も、B区で実施した手順で行った。A・B両区内の遺構完掘後は、速やかに清掃作業を行い、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量の実施、及び個別遺構の写真を撮影して、現地調査を終えた。

整理作業については、野々市町ふるさと歴史館内にある調査整理室で実施した。作業手順は、出土した遺物を水で洗浄し乾燥させ、乾燥した遺物に遺跡名や出土した地点などを注記した。注記後、一部の遺物を実測し、この遺物実測図や現地で表記した遺構実測図を製図トレースした。記録した遺物は、写真的撮影も行った。

これらの作業完了後は、調査担当者が原稿執筆、図面・写真的レイアウト等を行い、報告書を刊行した。

### 第2節 層序

層序については、第15図のB区南壁土層断面図を基に説明していく。

1と2は、灰色粘質土をベースとした土地区画整理事業以前まで行われていた水田耕作土である。3の橙灰粘質土は、これら耕作土の整地層にあたる。4の暗灰粘質土は、遺物包含層にあたり、中世の遺構面にも相当すると思われる。その下の5黒灰粘質土と6暗灰褐粘質土は、古代以前の遺物包含層にあたる。さらにその下にある黄褐色粘質土は、地山面である。

### 第3節 遺構

本調査で発見された主要な遺構は、掘立柱建物、竪穴状遺構、土坑、井戸、溝などである。調査区全体に遺構は密集しているが、A区の中央部からB区にかけて、前述した人為的な遺構を抽出することができる。また、掘立柱建物、土坑と竪穴状遺構はそれぞれ同一場所で造り替えを繰り返しており、各施設の設置箇所は決まっていたようである。

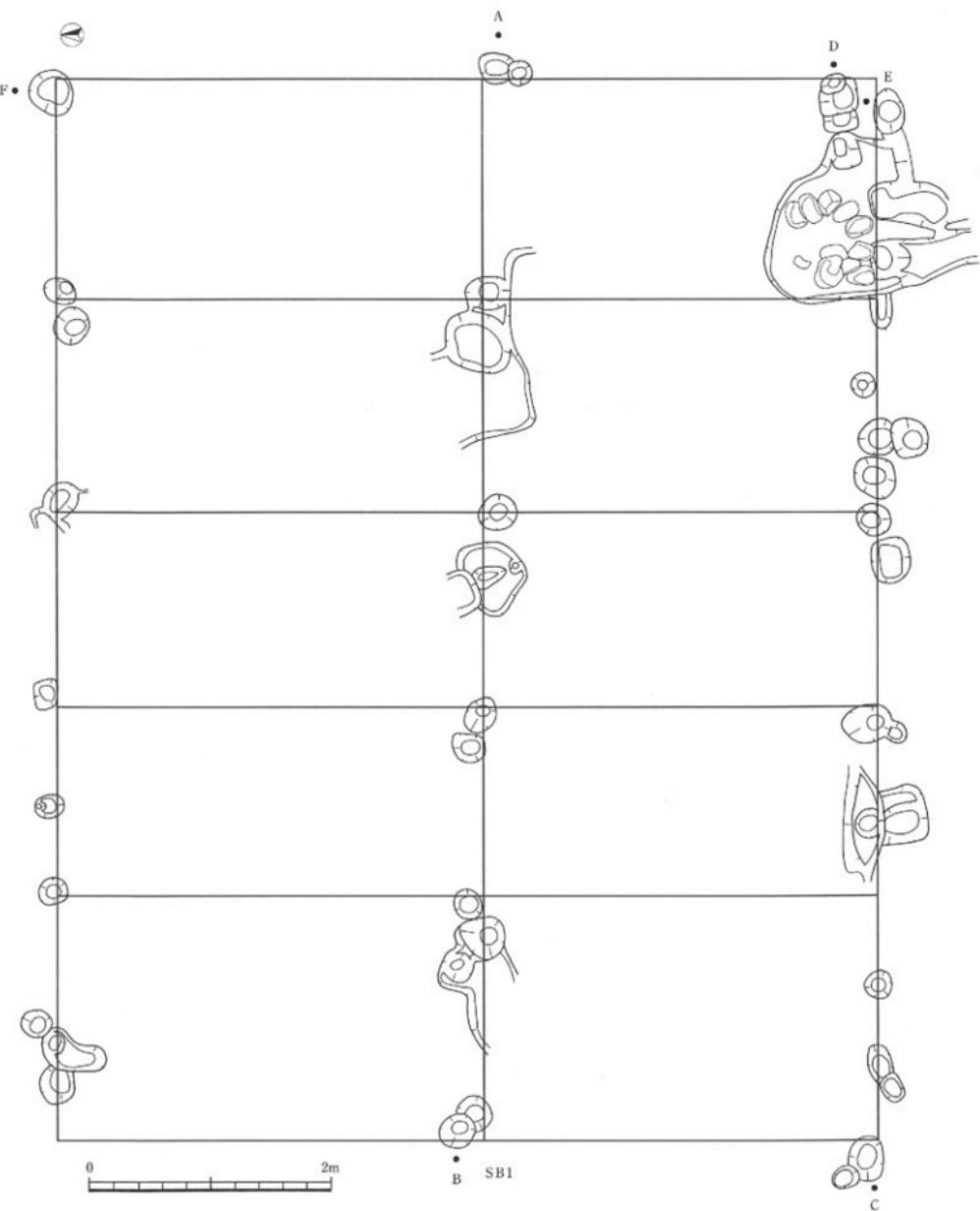
以下は、各遺構の個別の概要である。

#### S B 1

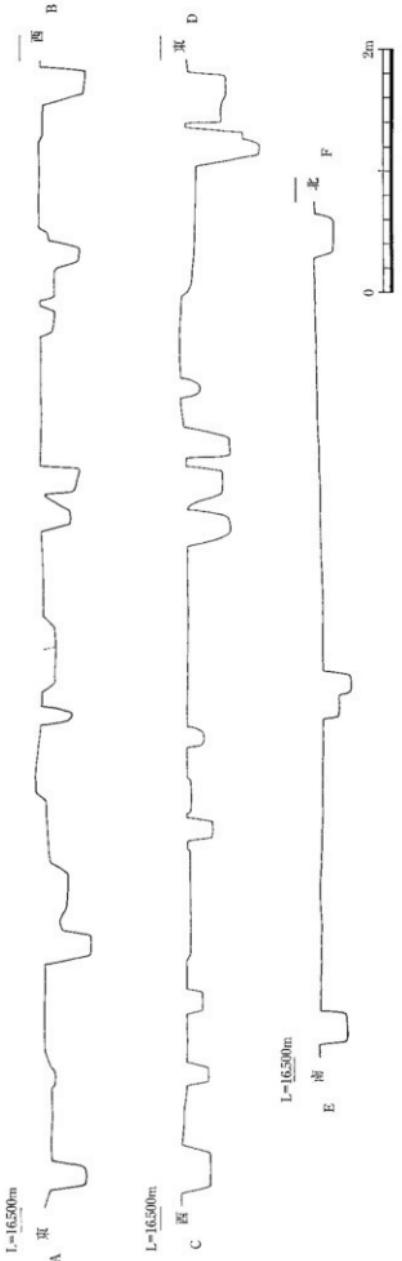
A区中央部に位置する。東西5間、南北2間の縦柱式建物である。方位はN 5° Eである。東西は860cm、南北350cm、面積30.1m<sup>2</sup>である。東西の1間の長さは、最大で200cm、平均170cm前後である。南北の1間の長さは320～360cmと、東西ライン1間分の倍の長さをもつ。柱穴は凡そ円形を呈して



第4図 調査区グリッド設定図 (S=1/400)



第5図 SB1 遺構図 ( $S=1/40$ )



第6図 SB1 断面図 (S=1/40)

おり、直径30cm前後が多い。穴の深さは30~40cmが大半を占める。なお、確認した柱穴の付近には、同規模の穴が複数認められることから、同一箇所で複数回建替えがなされていたと思われる。

#### S B 2

A区中央部にあり、SB1の中にすっぽりと納まる小型の建物である。東西2間、南北2間の総柱式建物である。方位はSB1とほとんど変わらない。なお、SB1との時間的な前後関係はわからない。東西の長さは450cm、南北の長さ420cm、床面積は約19m<sup>2</sup>を測る。東西の1間の長さは230cm前後、南北の1間の長さは平均200cmである。柱穴は、一部正方形をしたものも見られるが、ほとんどが円形プランである。穴の大きさは平均で直径30cm、深さは浅いもので30cm前後、深いものは55cmを測る。

#### S B 3

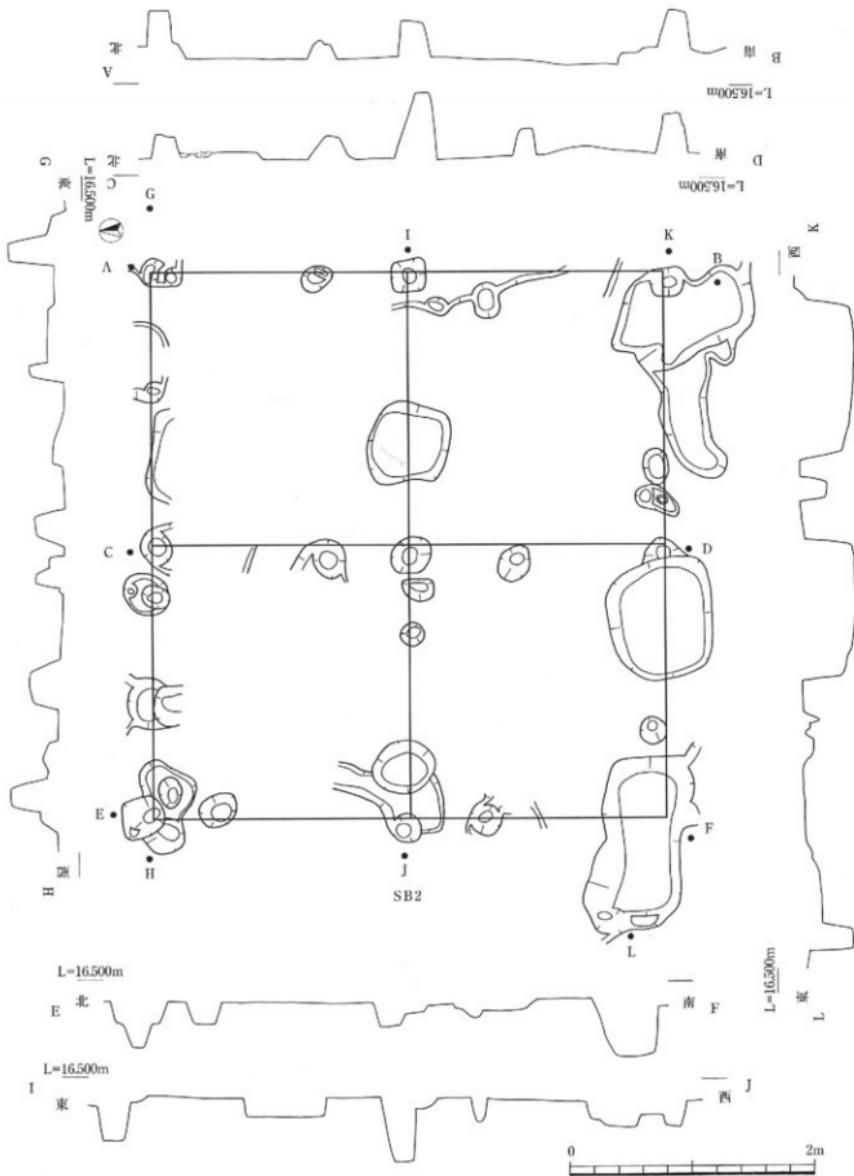
A区南東隅で見つかった東西棟の建物である。東西3間、南北2間の総柱式である。東端の柱間は他所より短いことから、庇であったかもしれない。方位は真北に近い。東西の長さは670cm、南北は500cm、床面積は約33m<sup>2</sup>である。柱間の長さは、東西が平均250cm、庇部は100~130cm、南北は230~250cmである。ただし、この建物の柱穴の位置はあまり均等に並んでおらず、それが多く見受けられるため、柱間の長さについてはばらつきがある。柱穴の大きさは、直径25~30cmの円形が主体で、深さは15~50cmと幅がある。なお、南東隅の柱穴P3では、掘り方に人頭大の自然石を入れて柱材の補強を施している。

#### S B 4

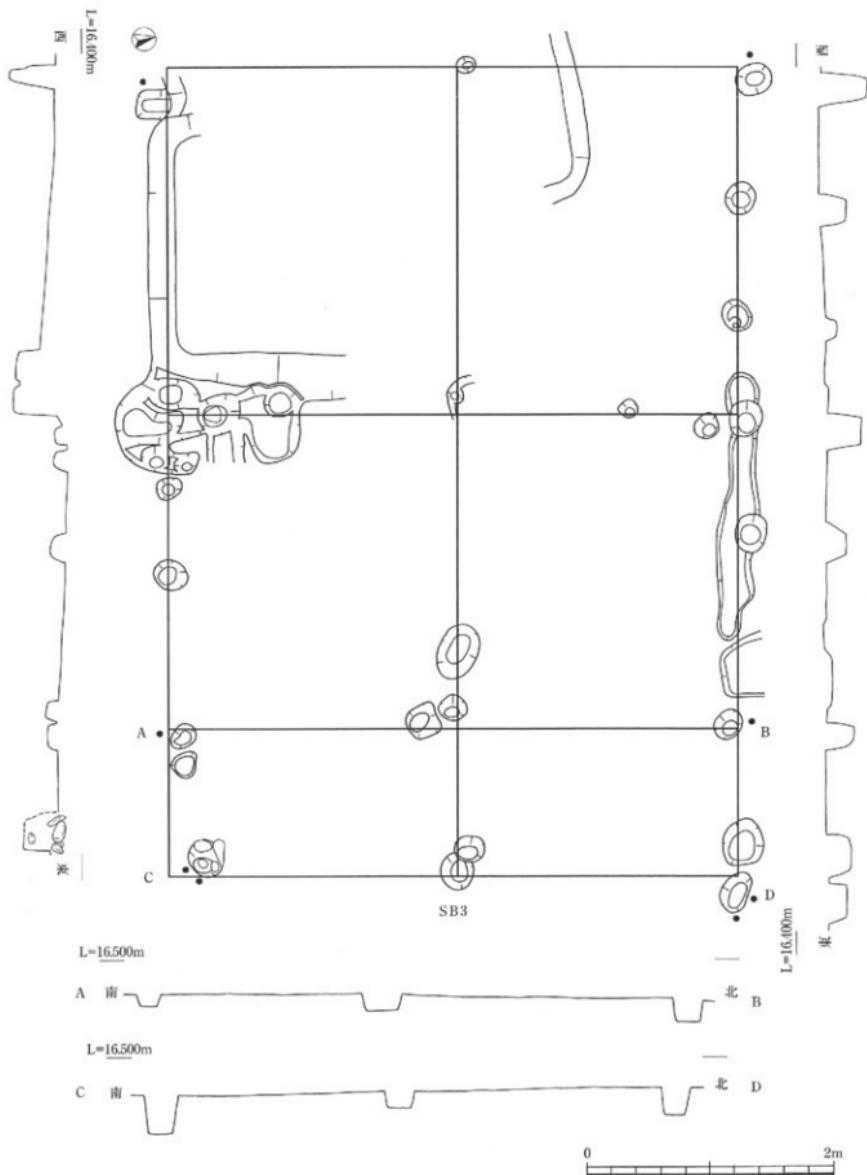
B区南端で確認した東西2間、南北3間の総柱式建物である。方位はN 5°Eで、SB1・SB2と同じ向きである。長さは、東西が約400cm、南北が約520cm、床面積が約21m<sup>2</sup>である。柱間の長さは、東西が170~200cm、南北が160~205cmである。柱穴の形状は、円形や方形、楕円形など様々で、穴の幅25~40cm、深さは18~35cmを測る。なお、建物は南方の調査区外へと伸びる可能性がある。

#### S I I

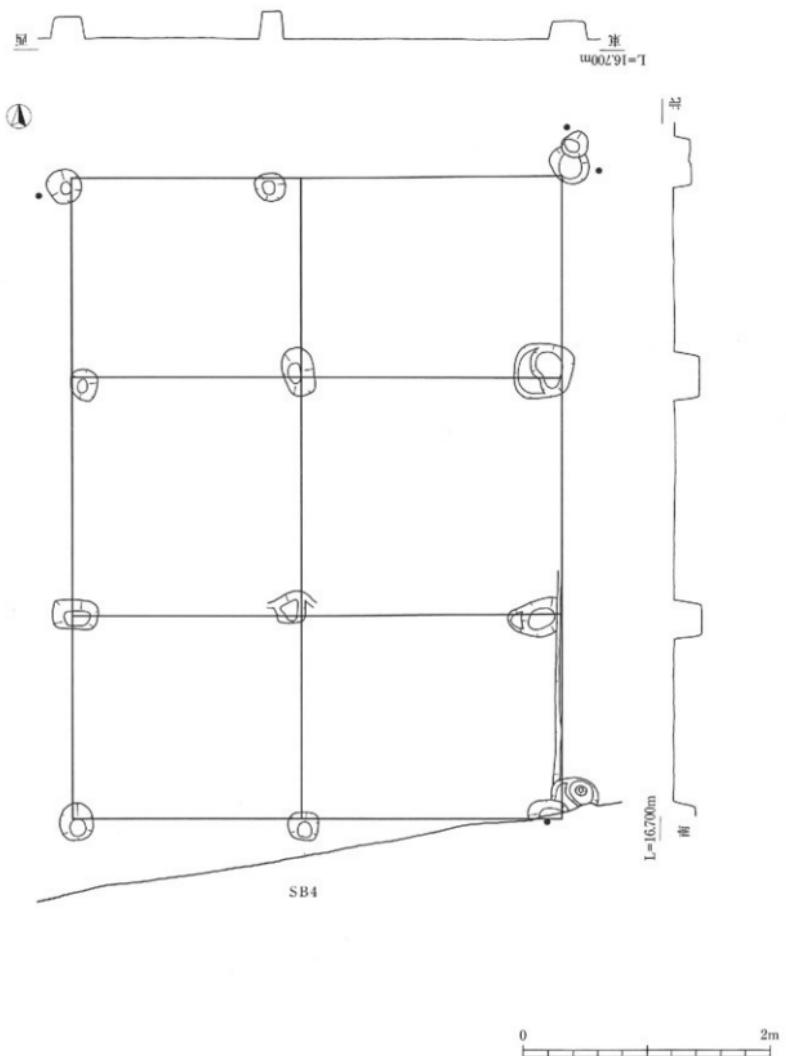
A区中央の西寄りに位置する。一辺約150cmの正方形を呈しており、方位はN 20°Wである。掘形のコーナーは鋭角にならず丸みをおびている。内部にはテラス状の段差がいくつもみられ、また、直径15cmほどのピットも掘られており、均一的なレベルは保っていない。深さは最深部で20cmを測る。



第7図 SB2 造構図・断面図 (S=1/40)



第8図 SB3 遺構図・断面図 (S=1/40)



第9図 SB4 遺構図・断面図 ( $S=1/40$ )

## S I 2

A区S I 1の西方に位置する。東西約140cm、南北約125cmの長方形をしており、方位はN 22° Eとやや北西—南東に軸を振る。コーナーは丸みを帯びている。また東側には、南北を走るS D 1によって切られている。深さは約30cmである。

## S I 3

A区中央部の西端に位置する。東西約140cm、南北約180cmの長方形をしており、コーナーは丸みをおびている。方位はN 20° Eで、北東—南西ラインに傾く。東端には南北を走るS D 1が交わり、土層堆積からS I 3の方が古いことが判明している。深さはおよそ40cmである。

## S I 4

A区S I 3より南東方に位置する。S K 5とS K 6とは切り合っており、S K 5とは不明であるが、S K 6とは本遺構の方が古いことが判明している。東西約210cm、南北約170cmの隅丸長方形プランをしている。深さは15cm前後である。

## S I 5

A区南西隅に位置する。東西に長い長方形プランであるが、東側3分の1はS I 6によって切られているため、全体の様相は捉えることができない。方位はN 3° Eであるが、ほぼ真北といってよい。東西300cm以上、南北170cm、深さ約60cmである。

## S I 6

A区南西隅に位置する。東側にS I 5が接しており、本遺構の方が新しいことが判明している。南西コーナーはやや丸みを帯びているが、基本はコーナーの角を明確にした正方形プランと考えられる。一辺は240～250cm、深さは30cm前後、方位はN 6° Eである。

## S I 7

A区中央南寄りに位置し、鋭角なコーナーをもつ竪穴状遺構である。南側半分以上はS I 8によって切られており全容はわからない。方位はN 4° Wで、真北に近い。東西ラインは162cm、南北ライン100cm以上、深さ44cmである。

## S I 8

A区中央南寄りに位置し、北側のS I 7を切り、南側のS I 9に切られている。3分の2以上は、このS I 9の掘削により滅失してしまい、様相を明らかにすることはできない。方位はN 6° Eで、ほぼ真北に近い。東西ライン182cm、南北ライン74cm以上、深さ46cmを測る。

## S I 9

A区中央南側に位置する。北側のS I 8を切り、南側のS I 10及びS I 11に切られている。上記S I 7・8と同様、他の竪穴状遺構に切られているため、全貌はわからない。東西ライン242cm、南北ライン150cm以上、深さ48cmを測る。方位はS I 7と同方向で、真北に近い。

## S I 10

A区中央南側に位置する。北側はS I 9を切っており、東側はS I 11によって切られている。プランは南北に長い長方形で、東西が304cm、東西242cm、深さ60cm前後を測る。方位はN 6° Eで、S I 6、S I 8と同方向となる。

## S I 11

A区中央南側に位置する。北西側でS I 9と、東側でS I 14と切りあいをもつ。堆積土から、S I 9より新しく、S I 14より古いことがわかった。なお、本遺構の東半分以上がS I 14に切られていることから、全容を明らかにすることはできない。東西110cm以上、南北248cm、深さ45cmである。

## S I 12

A区中央より南側に位置し、S I 7～9の東隣にあたる。S I 7とは北辺ライン及び方位が合致する。北側にはS K 9やS B 1の柱穴、南側にはS I 13・S I 14が接していることから、全体の様相は

わからない。残存している箇所から、東西ライン 240cm、南北ライン 250cm 以上の長方形をした形状と推測する。深さは 30cm である。土層堆積から、S I 1 3 よりも古いことが明らかとなっている。

#### S I 1 3

A 区中央より南側に位置する。北側と西側に接している S I 1 2 を切っているが、南半分を覆っている S I 1 4 に切られているため、全体規模は不明である。東西ライン 150cm、南北ライン 94cm 以上の長方形プランで、S I 8 とは北辺ラインと方位が同じである。深さは 52cm である。

#### S I 1 4

A 区南側に位置する。西側に S I 1 1、北東に S I 1 3、南西部に S I 1 5 が接しており、土層堆積からいずれの遺構よりも、S I 1 4 が最も新しいことがわかった。東西に長い長方形プランで、北西と南西のコーナーは鋭角であるが、北東と南東のコーナーは丸みをおびている。東西ライン 338cm、南北ライン 290cm で、西端には幅 90cm ほどの一段高いテラスが設けられている。テラスの存在から、本遺構は一度造り替えをした可能性がもたれるが、土層堆積からは抽出できなかった。深さは、50～60cm、テラス面は 40cm 前後を測る。方位は N 10° W である。

#### S I 1 5

A 区南東部に位置する。北西側に S I 1 4、南東側に S I 1 6 が接する。土層断面から S I 1 4 よりは新しく、S I 1 6 よりは古いことがわかった。方位は N 12° W で、S I 1 4 とほぼ同じ角である。S I 1 4 と S I 1 6 によって、本遺構の様相はわかりにくいか、東西 400cm、南北 330cm と東西がやや長い長方形プランであったようである。深さは 20～30cm である。なお、本遺構内中央に直径 15cm 程のピットがあり、S B 3 の柱穴の一部にあたる。

#### S I 1 6

A 区南東側に位置する。西側一帯は S I 1 5、東側には S B 3 の柱穴と思われる小穴が接する。土層断面から、本遺構の方が S I 1 5 よりも新規であることがわかっている。プランは一辺 230～240cm のほぼ正方形で、深さは 60cm 前後である。方位は真北である。

#### S I 1 7

A 区中央南端に位置する。西方には S K 1 3、北東には S K 1 4 が隣接し、東には S E 1 が接している。本遺構は S E 1 よりも古い。プランは東西に長い長方形であるが、S E 1 の掘削によって、全貌は明らかではない。東西 290cm 以上、南北約 130cm、深さ 60cm 前後を測る。

#### S I 1 8

A 区南東隅に位置する。コーナーの角が丸い隅丸方形プランであるが、南半分は調査区外へと伸びているため、全容は不明である。東西 228cm、南北 90cm 以上、深さ 30cm 前後である。方位はほぼ真北を向く。

#### S I 1 9

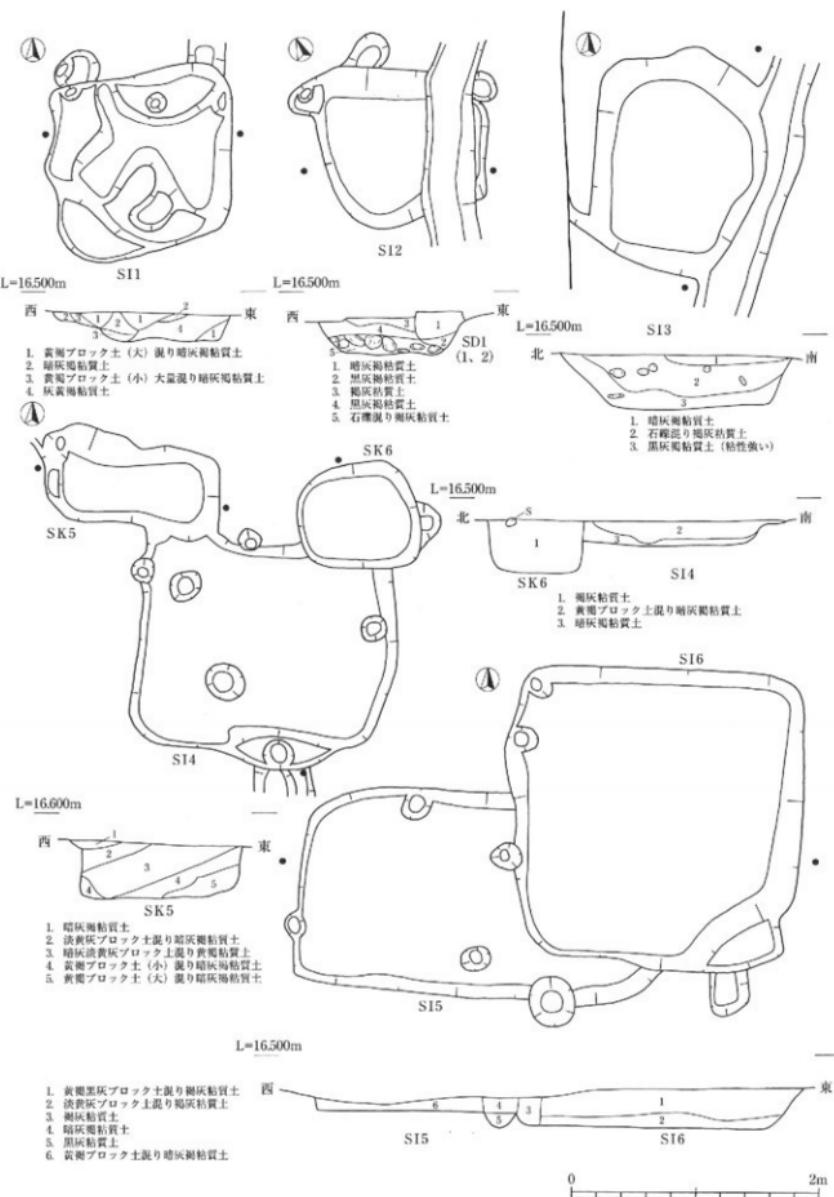
A 区南東隅に位置する。方形プランであるが、南側は調査区外へ伸びるために、全容を知ることはできない。東西 300cm 前後、南北 168cm 以上、深さ 60～70cm を測る。また、確認できる平面プランの様相から、台形状になる可能性もある。北方には東西溝 S D 4 が走っており、土層堆積から、S I 1 9 が新しいことがわかった。方位は N 8° W である。

#### S I 2 0

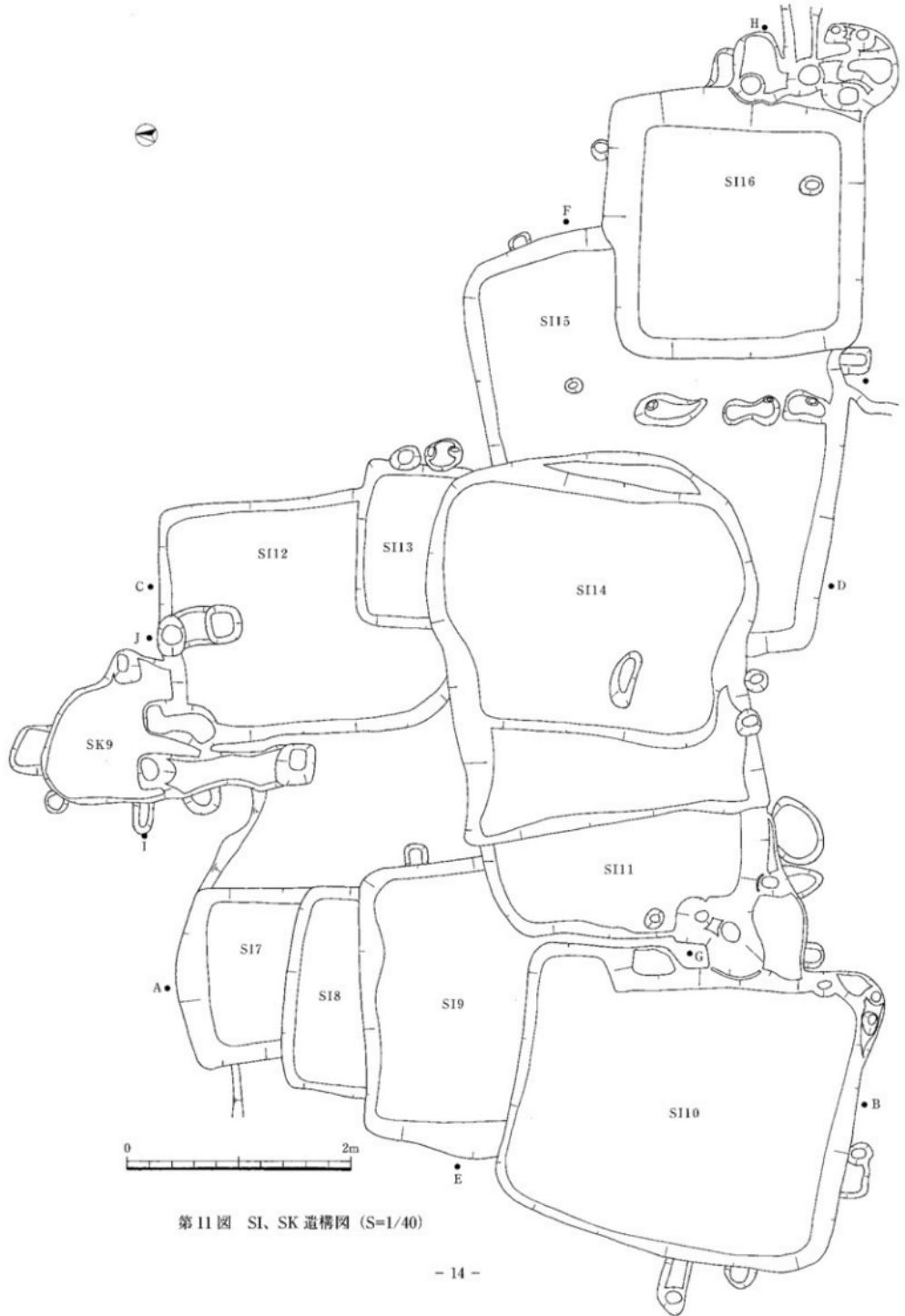
B 区中央北端に位置する。南東隅は S K 1 5 によって切られているが、全体規模は捉えられる。プランはやや南北が長い長方形で、コーナーの角は丸みを帯びた隅丸型である。東西ラインは 164cm、南北ラインは 198cm、深さは 40cm 前後で、床面には張床が施されていた。方位は N 3° E で、ほぼ真北に近い。

#### S I 2 1

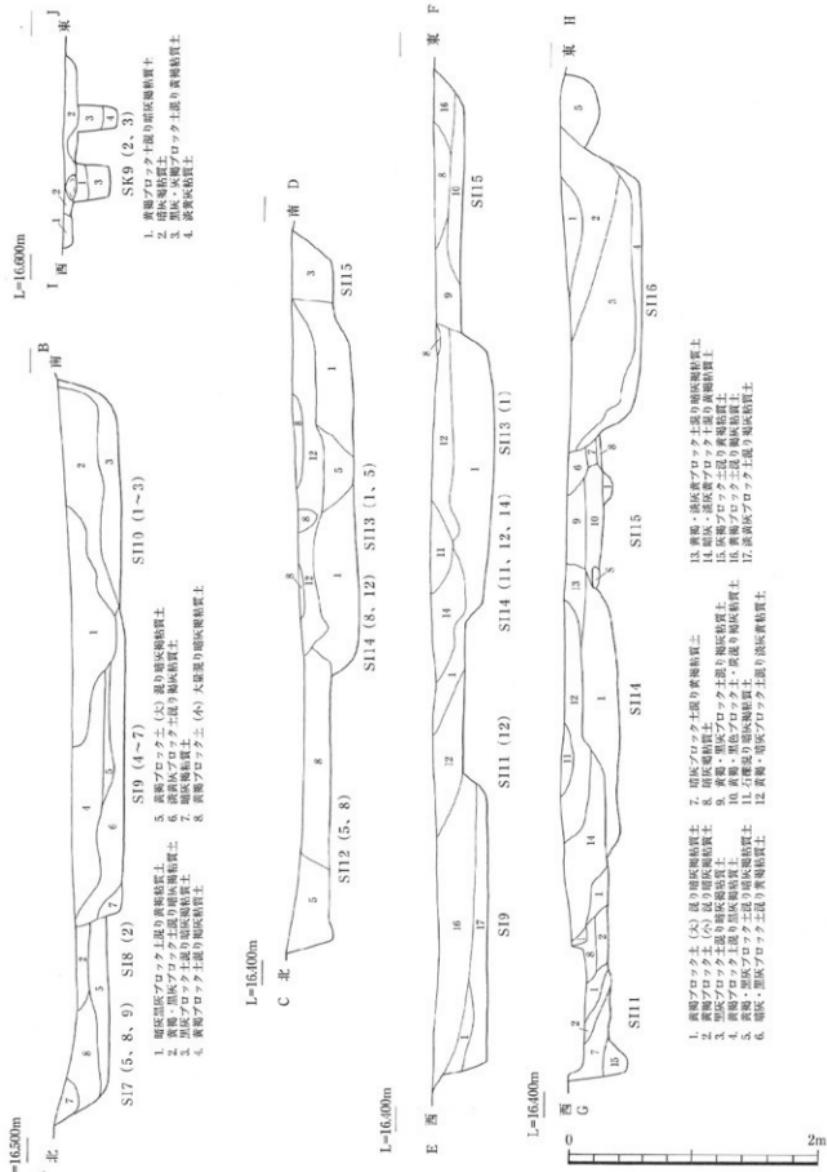
B 区中央部に位置する。北東隅は S K 1 5 によって切られているが、全体の様相は抑えることかで



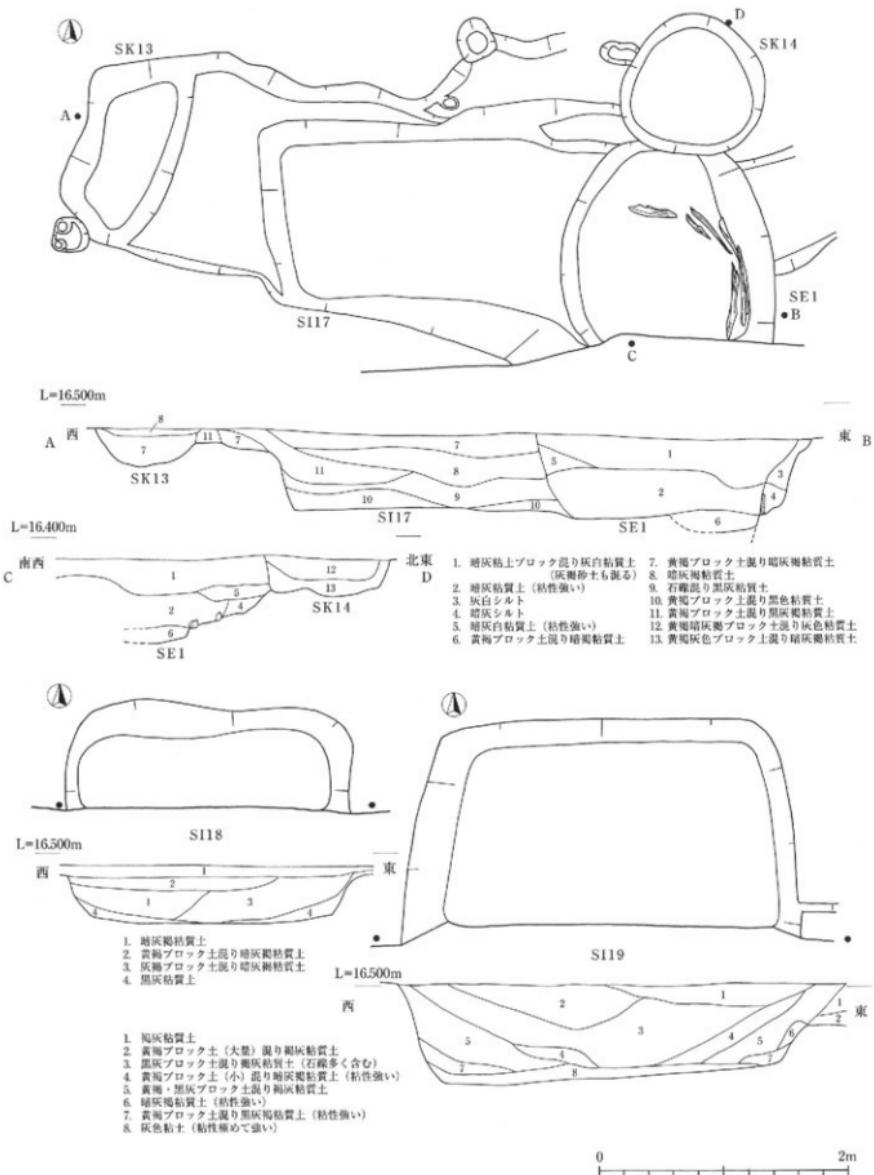
第10図 SI、SK 造構図・土層断面図1 (S=1/40)



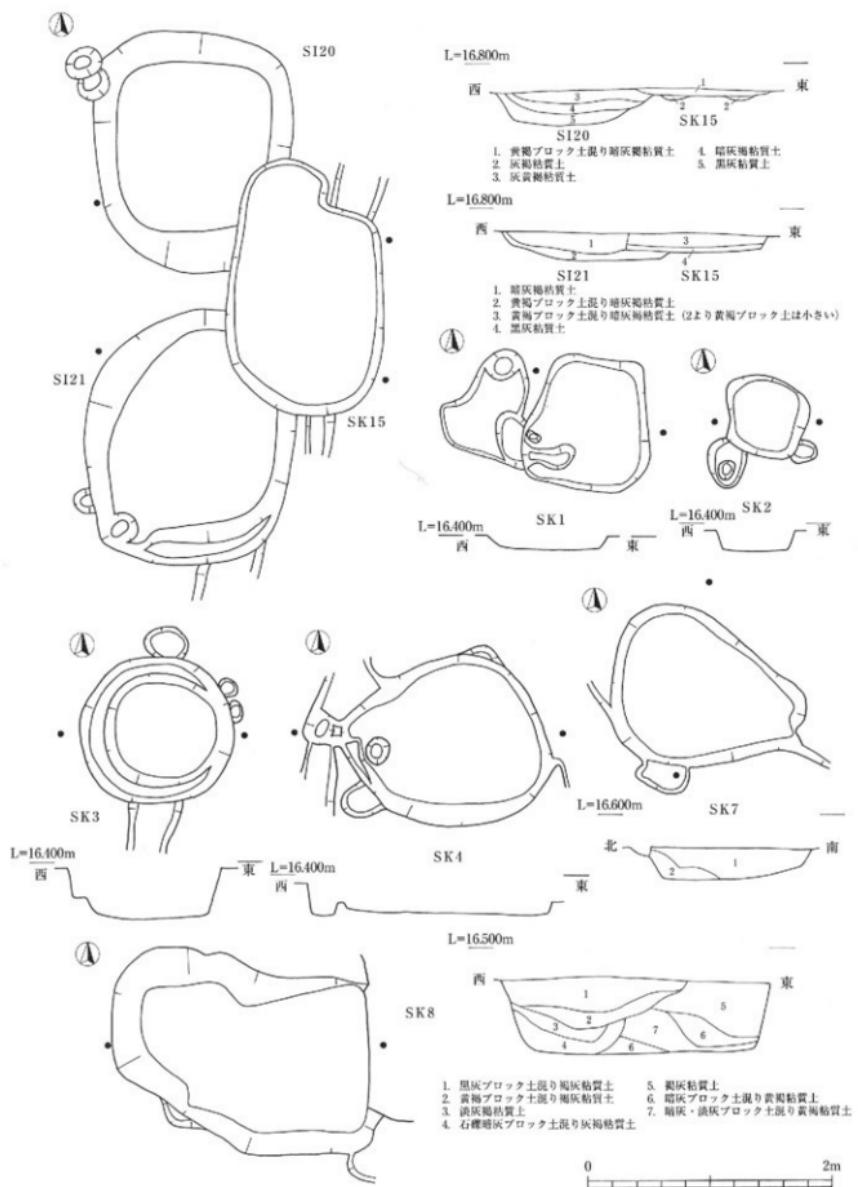
第11図 SI、SK造構図 (S=1/40)



第12図 SI、SK 土層断面図 (S=1/40)



第13図 SI、SK、SE 遺構図・土層断面図 (S=1/40)



第14図 SI、SK造構図・土層断面図2 (S=1/40)

きる。コーナーの角は丸く、歪ながらも南北に長い長方形プランと捉えられる。南北溝 S D 7 と接しており、土層堆積から本遺構の方が新しい。東西ライン 156cm、南北ライン 210cm、深さ 30cm 前後を測る。方位はほぼ真北を向いている。

#### S K 1

A 区中央に位置し、北側ラインが短い台形の形状をしている。一辺の長さは、北ラインは約 70cm、南と東西ラインは約 100cm で、深さは約 10cm である。方位は N 12° E である。

#### S K 2

A 区中央にあり、S K 1 の南隣に位置する。方位は N 18° E で、一辺 58 ~ 62cm の正方形プランである。深さは 15 ~ 20cm である。

#### S K 3

A 区中央東端に位置する。直径 125cm の円形プランをしている。深さは約 30cm で、東側を除く三方には幅 10cm ほどのテラスが設けられている。テラスの深さは 20cm である。遺物は出土していないが、堆積覆土は黄褐・暗灰褐ブロック土混り灰色粘質土で、近世以降の遺構と推察される。

#### S K 4

A 区中央東端に位置する。長方形プランであるが、南コーナーの角が曖昧であることから、歪な形状に見える。一辺は長辺が約 150cm、短辺が約 140cm で、深さは約 20cm である。方位は N 30° W で、北東 - 南西ラインが長辺となる。

#### S K 5

A 区南西寄りに位置する。形状は東西約 140cm、南北約 80cm の長方形プランで、方位は N 12° E を測る。南東隅で S I 4 と切り合うが、前後関係は不明である。土層を観察すると、東から西方向に地山土混じりの土などが斜め状に入りこんでいることがわかり、人為的に埋められたものと推察される。深さは約 50cm を測る。S B 2 の南西隅の柱穴がこの土坑内に存在すると思われるが、その痕跡は全く見られなかった。建物廃絶後にこの土坑が掘られたためと考えられる。

#### S K 6

A 区 S K 5 の東隣に位置する。ほぼ真北に軸を置く方形土坑で、東西約 100cm、南北約 80cm、深さ約 50cm を測る。角は丸く隅丸型をしている。土坑の東端に S B 2 の柱穴、南端に S I 4 が切り合っている。堆積覆土から、S B 2、S I 4 よりも本遺構の方が新しいことがわかっている。

#### S K 7

A 区 S K 4 の南西側に位置し、S D 2 の中におさまっている。東側が狭く西側が広いフラスコ状の形をしている。北西 - 南東方向が長辺となり、約 170cm を測る。北東 - 南西ラインの短辺は約 120cm で、深さは約 20cm である。土層断面から、本遺構は S D 2 よりも新しい。

#### S K 8

A 区南隅に位置する土坑で、東側は調査区外にのびる。やや歪な長方形プランに見えるが、平面プランの細かい観察と土層堆積から、東西 2 基の方形土坑が切りあつたものである。2 基のうち、西側の方は一辺約 120cm の隅丸正方形土坑で、約 55cm の深さをもつ。東側の方は、東西ライン一辺約 140cm 以上、南北ライン約 150cm の方形プランを有している。深さは 40cm 前後である。土層断面から西側の土坑の方が新しいことが判明している。

#### S K 9

A 区南側中央部に位置する。S B 1 の柱穴や S I 1 2 、その他小穴などの遺構がいくつも重なりあっているため形状はよくわからないが、北西 - 南東を長辺にもつ梢円形プランと想定する。南東端は S I 1 2 と接しているため、全体の規模も不明である。長辺 130cm 以上、北東 - 南西ラインの短辺約 110cm、深さ約 10cm である。本遺構の中央部には、長径 20cm ほどの人頭大の自然石を輪形にして並べている。一部に積み上がっている石もあることから、当初は複数段積み上げていたかもしれない。

用途は不明である。

#### S K 1 0

A区西端に位置する。正方形プランと想定されるが、コーナーの角が大きくとれて丸くなっているため、円形に見える。方向はN 35° Wで、一辺約100cm、深さ約30cmを測る。

#### S K 1 1

A区南西隅に位置する。東西ラインがやや長い長方形プランであるが、コーナーは丸みを帯びた隅丸型である。東西ライン154cm、南北ライン129cm、深さ60～70cmである。方位はほぼ真北である。本遺構の中央部の底から割れた炉縁石 石8が数点固まって出土した。

#### S K 1 2

A区南西隅に位置する。台形プランが大きくくずれ、歪な卵型に見える。北東～南西ラインが長辺で、長さは108cm、北西～南東ラインの短辺が86cm、深さ約30cmを測る。方位はN 33° Wである。

#### S K 1 3

A区中央南端に位置する。北方にはS I 7～S I 1 6の竪穴状遺構群が並び、東方にはS I 1 7が所在する。形は大きく乱れた台形に見えるが、南北に長い長方形プランの可能性もある。長辺は北東～南西ラインで160cm、短辺は北西～南東ラインで85cm、深さ約30cmを測る。方位はN 15° Eである。

#### S K 1 4

A区中央南端に位置する。土層堆積から、南方のS E 1よりも新規であることがわかっている。プランは直径115cmの円形を呈し、30～40cmの深さをもつ。遺物は出土していないが、堆積覆土から近世以降の遺構と推測する。

#### S K 1 5

B区中央やや北寄りに位置する。S I 2 0、S I 2 1、S D 7などの遺構と切りあっており、土層断面などから、いずれも本遺構が他よりも新しいことがわかっている。プランは南北に長い卵型をしているが、北側は別の遺構と混同したためか大きく変形している。南北の長辺は175cm、東西の短辺は128cm、深さは15cm程とやや浅い。方位はほぼ真北を向く。

#### S K 1 6

B区南西端に位置する、直径100～110cmの円形土坑である。南西端にはS B 4の柱穴が掘り込まれている。深さは約20cmである。

#### S K 1 7

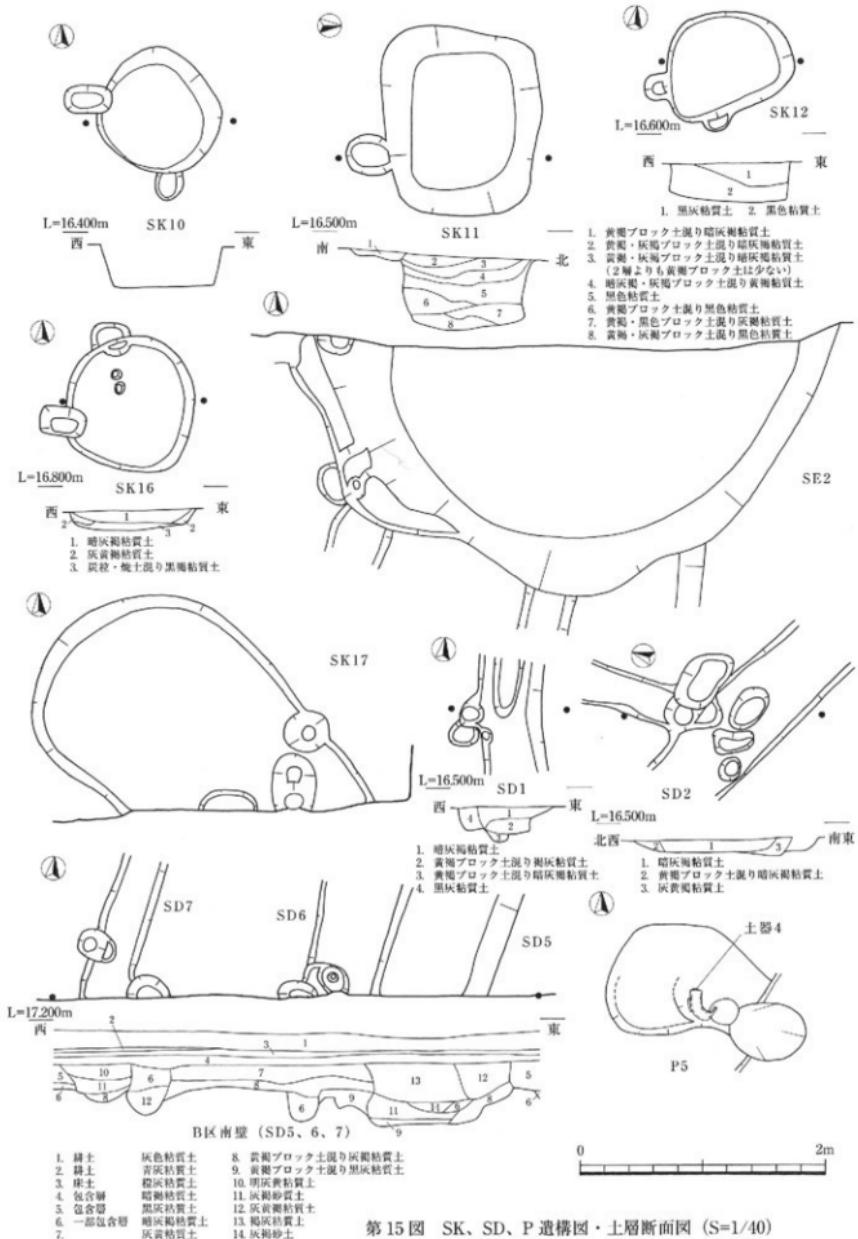
B区南東隅にある土坑である。北西～南東ラインが長い楕円形をしたプランである。本遺構の4分の1ほどが調査区外へと伸びる。大きさは長辺250cm以上、北東～南西ラインの短辺182cm、深さ15cmである。調査の状況から、自然状にできた落ち込みの可能性もある。本遺構内から、17の土師器皿が出土した。

#### S E 1

A区中央南端に位置する。S I 1 7、S K 1 4、S D 4と切りあっており、S I 1 7、S D 4よりは新しく、S K 1 4よりは古い。南北に長い楕円形をしており、南側4分の1は調査区外へと伸びる。掘形の規模は、南北辺160cm以上、東西辺172cm、深さ約65cmを測る。内部には井戸枠の材として使用された曲げ物の木片が見つかっている。井戸枠は直径約70cm、深さは75cm以上で、完掘はしていない。堆積覆土が暗灰粘質土であることから、中世よりも新しい近世以降と考えられる。

#### S E 2

B区中央北端に位置する。本遺構の北側半分は調査区外となる。プランはやや崩れているが円形と考えられ、直径440～450cmの規模を有する。深さは60cm以上で、完掘はしていない。木製井戸枠があったと思われるがその痕跡はなく、井戸としての機能がなくなった段階で抜き取られたと推測する。



第 15 図 SK、SD、P 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

## S D 1

A区西側を南北に走る溝である。南西から北東方向へと向かい、途中で真北に進路を変えて、北側調査区外へと伸びる。溝幅は40～50cm、深さ15～25cmで、溝底での高低差はほとんど見られない。

## S D 2

A区中央で見られる溝である。調査区東端から西へ向かい、6mほど進んだ後北方へと進路を変える。そこから約5m進んだ後、今度は北西方向に向きが変わって4m進んだところで終焉する。北西方向に向きが変わる所から、西方向に伸びる溝が分岐する。溝幅は40cmの狭い箇所も見られるが、平均60～80cmの規模を有する。深さは5～15cmと浅い。なお、西へ分岐する溝は、幅30～50cm、深さ10cm前後である。

## S D 3

A区南東部、S I 15の東に存在する東西方向の溝である。S I 8やS I 13と同方位のN 6°Eである。幅は、25～35cm、深さ約9～17cm、長さは48m以上で、溝本体は、東方調査区の外へと伸びる。IIの土師器皿片が出土している。

## S D 4

A区南東隅に位置し、東西方向に走る。方位はS I 19とほぼ同じで、N 8°Wである。調査区東から西方向へ7m進んだところでS E 1と合致する。S E 1やS I 17付近からは、溝の延長となるような遺構は確認できなかったので、本遺構はS E 1の箇所で行き止るか、南方へクランクすると思われる。溝幅は80～100cm、深さは10～15cmを測る。

## S D 5

B区中央を南北方向に進路をとる溝である。N 15°Eと真北からやや東に振る。幅は100cm前後、深さは約25cm、北端ではS E 2に切られているため、その後の進路はわからない。S D 3とは溝幅がほぼ同じであることから、同一の遺構になるかもしれない。

## S D 6

B区中央を南北に走る溝である。S D 5の西隣を並走しており、土層断面からS D 5より古いことがわかった。溝幅は30～50cmで、北方へ向かうほど狭くなっていく。深さは10cm前後と浅い。

## S D 7

B区中央を南北に走る。S D 5より西方1mのところにあり、S D 5、S D 6とは同一方向をとる。S I 2 1やS K 1 5、S E 2といった主要遺構にほとんど切られており、古い時期の様相をもつ。B区北の調査区を経て、その延長上にあるA区からは溝の続ぎが見られないことから、途中で行き止るか方向を変えていると予想される。溝幅は30～50cm、深さは10cm前後である。

なお、B区南壁面の土層を観察すると、(第15図参照) S D 5とS D 7との間の堆積層が周囲の土層と相違していた。本調査区では、地山土より上の層は、遺物包含層と推される黒灰粘質土や暗灰褐粘質土が堆積するが、S D 5とS D 7との間の層は、灰黄粘質土や黄褐ブロック土混じり灰褐粘質土が堆積している。これらの土は、地山土が混在したものと思われ、人為的に埋めたものと考えられる。また、両溝は同方向に並走していることから、S D 5とS D 7との間の約2mは、道路状遺構であった可能性もある。

## P 5

B区中央のS I 21東隣にある穴である。長辺100cm、短辺80cm、深さ35cmの柱穴にても溝色ない穴である。堆積土上層にあたる標高16.58m地点で、須恵器短頸壺4が出土した。出土した短頸壺は欠損しているが、器形の全容はわかるため造存率はよい。この土器は、地鎮などを目的とした埋納用とも考えられる。

#### 第4節 遺物

出土遺物については、縄文時代、古代、中世の3時期のものが出土している。

縄文時代については土器片 10 点確認できた。

古代においては、P 5 から出土した 4 の須恵器短頸壺のほかに、須恵器、土師器の破片 20 点程発見した。

今回の調査で最も多かったのは中世の遺物である。内容については土器、国産陶器、中国製磁器、行火・炉縁石などの石製品、鉄製品などが挙げられる。

土器は土師質皿と瓦質の火鉢が見つかっている。瓦質火鉢は 1 点のみの出土である。国産陶器は加賀、珠洲、越前、瀬戸・美濃焼がある。加賀、珠洲、越前焼は壺・壺・擂鉢の 3 器種に限定されている。瀬戸・美濃焼は灰釉の平碗や卸皿などが確認された。中国製磁器は青磁碗 1 点のみである。

石製品では行火・炉縁石といった暖房器具が主で、これらの他に人頭大の自然石が各遺構内から見つかっている。自然石の多くは煤が付着しており、何らかの要因で火焚の中に入ったものと思われる。また、この石の出土量は、周辺地域で確認した中世遺跡と比較して断然多い印象を受けた。この自然石の用途は不明で、今後検討していかなければならない。

鉄製品については、ほとんどが釘であった。

遺物の出土量は約 560 点で、コンテナ箱 7 箱分（うち、土器・陶磁器は 3 箱分）となる。土器・陶磁器については、9 割方が中世土師器皿である。なお、本調査区の面積は、660m<sup>2</sup>と小規模なものであったが、調査区内には中世の掘立柱建物や竪穴状遺構、土坑などの遺構が密集して見つかり、足の踏み場のないほど穴が錯綜していた。しかし、発見された土器・陶磁器については、さほど多くないようと思われる。

主要な遺物については、第 16 図～第 22 図にかけて実測図に掲載した。図については計測が可能なものを最大限抽出し、おろし目や文様など特殊なものがある箇所については拓本などを使って掲載した。以下、図中の主要なものについて説明する。

1 は縄文時代晩期後半の中屋式粗製深鉢の口縁部である。口縁端部は面をとっている。

4 は P 5 から出土した須恵器短頸壺である。全体の 4 分の 1 は欠損しているが、器形の全容は確認できる。肩部と内面底部には、焼成時に灰が降り落ちて生じる自然釉を確認できる。口縁端部は全域にかけて欠損しており、人為的に打ち欠いた可能性をもつ。

5～18 は中世土師器皿である。5～12 は口径 7～8cm の小型タイプで、13～18 は口径 11cm 前後を測る大型タイプである。小型のものは、口縁部に一段のナデを施すだけで、他には大きな手を加えない A タイプで、大型のものは、口縁部に一段のナデを入れ、大きく外反する E タイプであることがわかった。小型の 5～8 の口縁端部は面取りする。7、9、11、12 については、底部と体部との境の立ち上がりの屈曲が非常に強い。また、10 と 12 は器形の歪みが著しい。大型の 13 と 14 の口縁端部が面取りしている。16 は身が深く、器形の歪みが著しい。時期は、藤田編年の IV-I 期（14 世紀後葉）頃と考えたい。（藤田 1997）

19～22 は珠洲焼である。19 は壺の底部である。外底部には静止糸切りの痕跡を見ることができる。20 は口径法量 30cm ほどの中型の鉢である。口縁端部は肥厚した内端に広く面をとり、そこに横目齒状文帯を巡らしている。21 は擂鉢体部である。内面の下半には幅 3.5cm、17 目の擂齒原体を用いた卸し目が数条見られる。22 は擂鉢底部である。内面には幅 3.3cm、10 目の卸し目を全域に巡らしている。時期は吉岡編年（吉岡 1994）でみると、珠洲 IV 期から V 期（14 世紀後半～15 世紀前半）までと考えられる。

24 は瀬戸灰釉平碗で、古瀬戸後 II 期（14 世紀後半～15 世紀前半）と考えられる。（藤澤 2008）25 は加賀焼壺底部である。26 は瀬戸灰釉卸皿である。27 は瓦質浅鉢である。口縁帶に方形×入重画紋様が押されている。（水澤 2010）

鉄製品1と2は釘である。2は途中で直角近くまで曲げられている。3は楕形淬である。

石製品1～5は行火の破片である。これらは全て前側面にやや上向きの口を大きく開けて、そこに炭火入れるタイプである。14世紀末以降の所産である。8はSK11の底から出土した炉の縁石である。発見したときは欠損した状態であったので、廃棄時に意図的に割った可能性がある。先端部は炉石と炉石を接続するため大きく削り取っており、幅が短くなっている。四面中三面は煤が付着している。6は炉縁石の一部である。二面に煤を確認することができる。7は自然石の形状を保った砥石である。全面で研いだ痕跡が認められる。9～27は自然石であるが、煤が付着している。煤は、20・21・24・25など全面に付くものと、15や22のように先端部に付着するものとに大別される。また、16や17のような煤の付着の薄いものも認められる。なお、9・15には人為的に磨った痕跡があり、砥石にも使用されていた可能性がある。これらの用途は不明であるが、火元である開炉裏などの中に据えていたかもしれない。

註 土器や陶磁器の分類・年代決定については以下の文献を参考にした。

- 垣内光次郎 1999「石の文化誌」『中世北陸の石文化I』北陸中世考古学研究会
- 柿田 祐司 2006「加賀・能登の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』  
北陸中世考古学研究会
- 藤澤 良祐 2008「中世瀬戸窯の研究」 高志書院
- 藤田 邦夫 1997「中世加賀国の土師器様相」『中近世の北陸－考古学が語る社会史－』 桂書房
- 水澤 幸一 2010「中世越後の瓦器文様」『新潟考古 第21号』新潟県考古学会
- 宮下 幸夫 1997「在地窯「加賀窯」」『中近世の北陸－考古学が語る社会史－』 桂書房
- 吉岡 康暢 1994「中世須恵器の研究」 吉川弘文館

## 第4章 総括

本調査区は、660m<sup>2</sup>と狭小な面積であったが、全域に遺構が密集したエリアであった。そのほとんどは、中世に帰属するものであるが、遺構密度の割合から見ると、出土遺物は総体的に少ないとと思われる。以下、時代ごとにその様相を述べたい。

### 縄文時代

本調査区における縄文時代については、Iの中屋式の深鉢の破片1点しか確認できなかった。しかし、平成21年度に本調査区の東隣で発掘調査したところ、縄文晚期の土器と打製石斧を検出しており、この地で人々の動きがあったことは確実である。周辺地での調査の様相を含めて考えると、縄文時代における本調査区一帯は、食料採取などを目的とした一時的な生活拠点地であったと推される。

### 古代

9世紀代の須恵器数点を確認した。うち、4の短頸壺は残存率が良く、P5内から出土した。古代で確認した遺構は、この小穴1基だけである。本調査区南方50mには、9世紀頃成立した古代北陸道が東西方向に走り、その周辺には、道路跡と連動するかのように、複数の堅穴建物跡や掘立柱建物跡が混在して建てられている。以上から、本調査区周辺には、当該時期の集落跡が存在しており、今回見つかった遺構・遺物はそれに関連したものと考えられる。

### 中世

本調査で最も遺構・遺物を抽出した。主な遺構として、掘立柱建物、堅穴状遺構、井戸、土坑などが挙げられ、遺物については、土師器皿、珠洲焼鉢、瀬戸焼碗・鉢皿、行火、炉緑石など日常雑器が出土している。時期は、14世紀後半～15世紀前半とする。

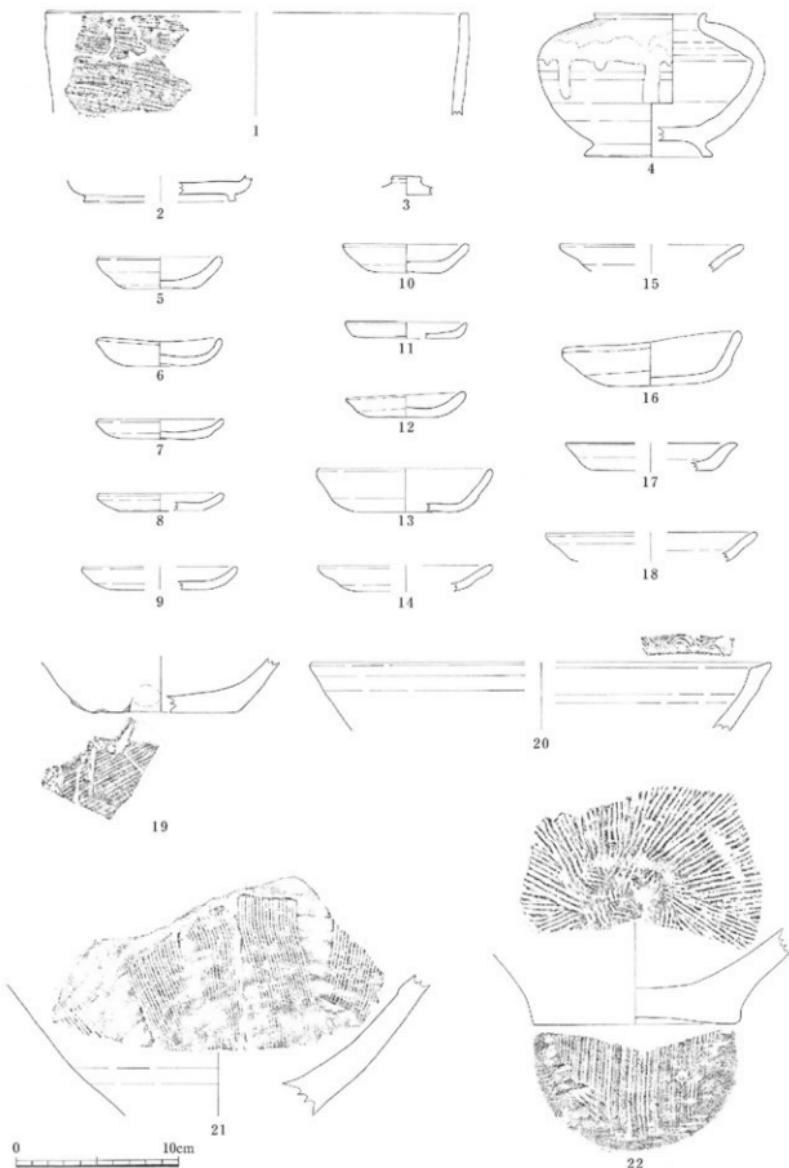
主要な遺構は、A区中央南半からB区一帯にかけて目立つ。各遺構はいくつも切り合いを有していることから、集落内で施設の改修を何回も繰り替えていたようである。また、掘立柱建物、堅穴状遺構は、同じ箇所で複数回造り替えを繰り返していることから、集落内の施設の配置は決まっていたと考えられる。

また、SD1・4・5は、建物などの主要施設から外れるような配置をしている。これらの溝は排水のほかに、集落内の宅地を区画するための機能をもつと思われる。

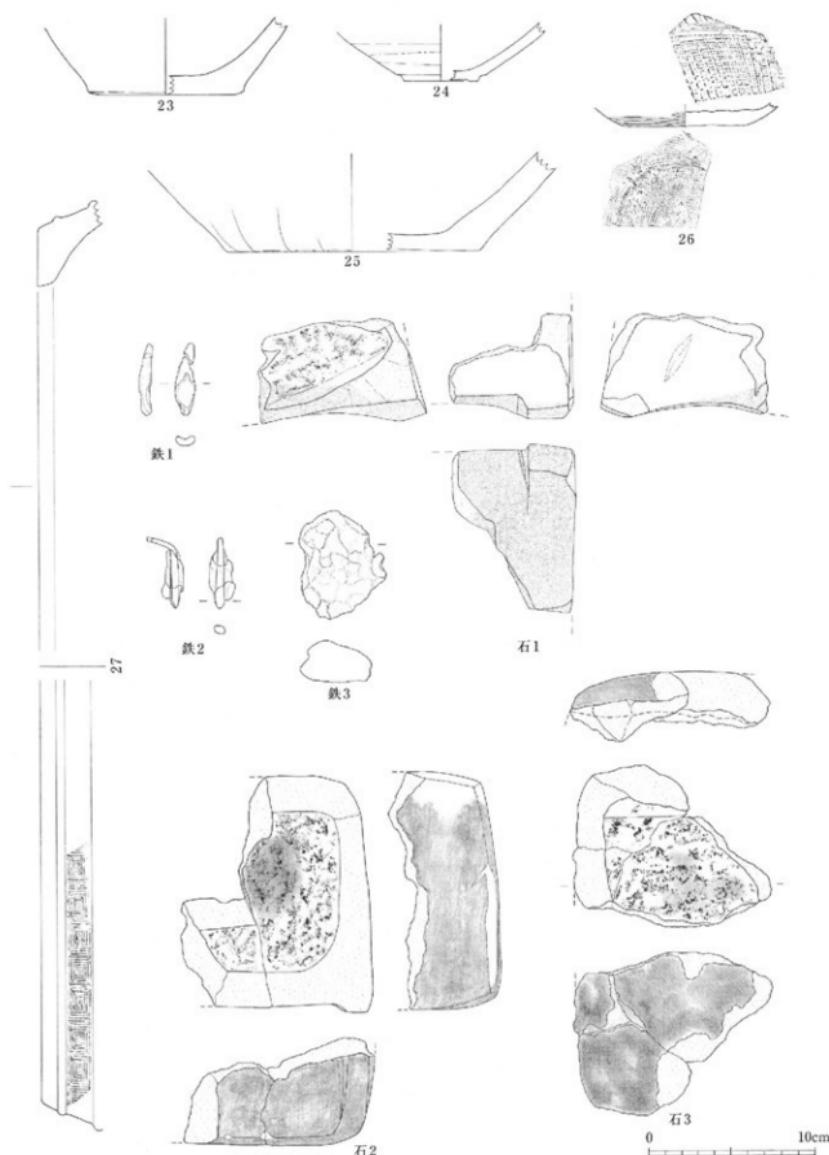
B区北端からSE2を検出した。掘立柱建物、堅穴状遺構、土坑などは複数確認できたが、井戸については、SE2の1基のみであった。このことから、井戸は、集落に集住する複数戸の家屋に対して、共同用として使用したと考えられる。

A区中央北半については、溝やピットなどの遺構を多く確認したが、人為的に掘削したものは少なく、かつ、遺物もほとんど確認しなかったことから、このエリアは、耕作地と推測する。

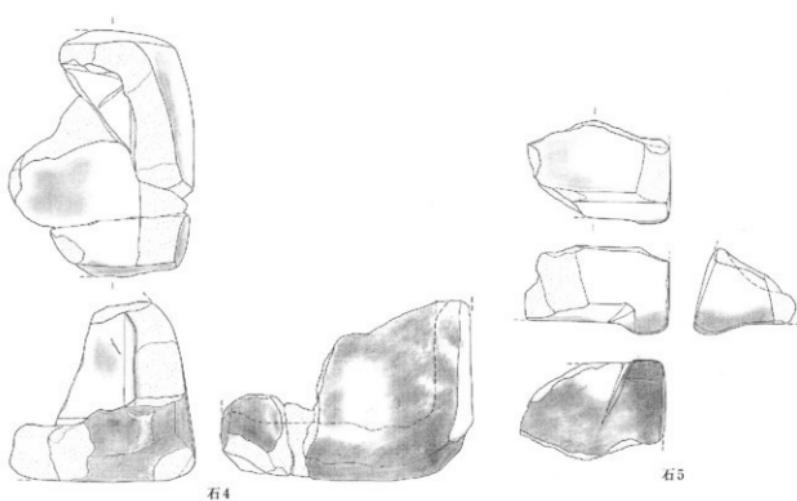
本調査区の周囲には、過年度に調査した箇所がある。本調査区より北・東・南部では、目立った遺構を見る事ができないことから、A区北半のような耕作地が広がっていたと想定される。本調査区西方は、現在、三日市集落が存在しており、詳細な調査を行っていないため不明な部分は多いが、今回確認した中世集落が伸びていく可能性はある。



第16図 土器、陶器実測図 ( $S=1/3$ )

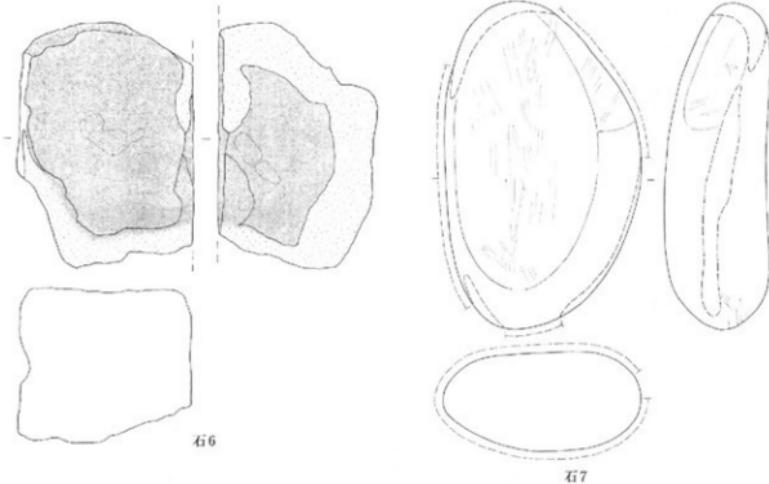


第17図 土器、陶器、鉄製品、石製品実測図 (S=1/3)



石4

石5

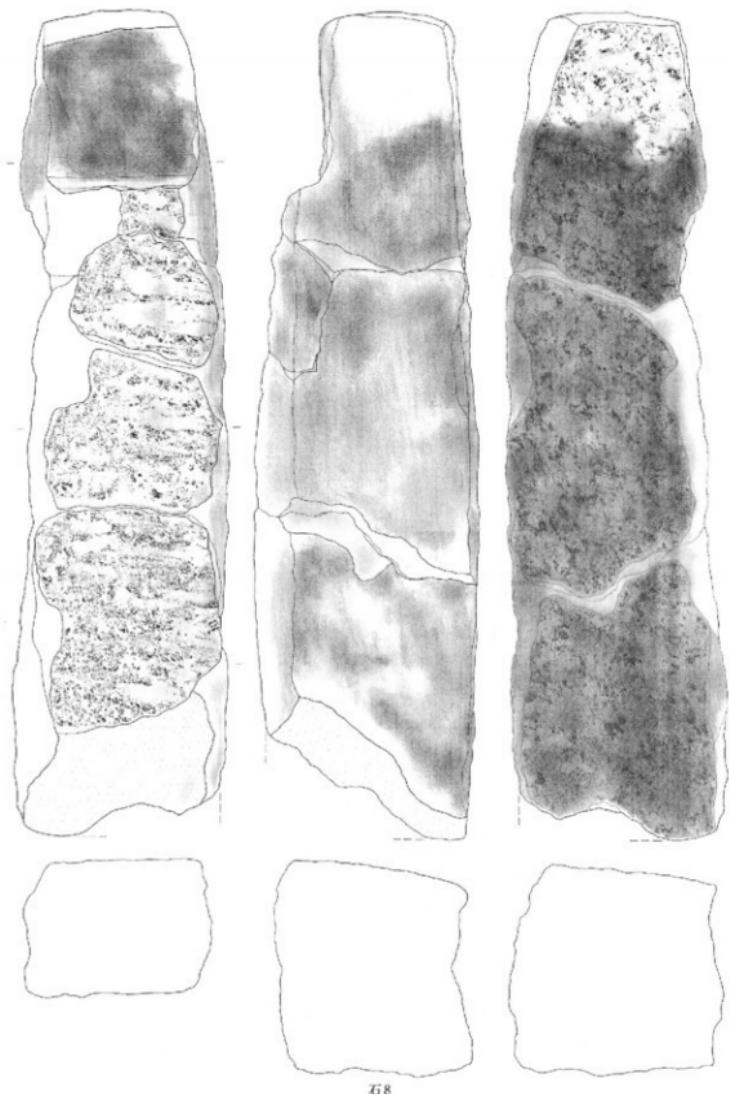


石6

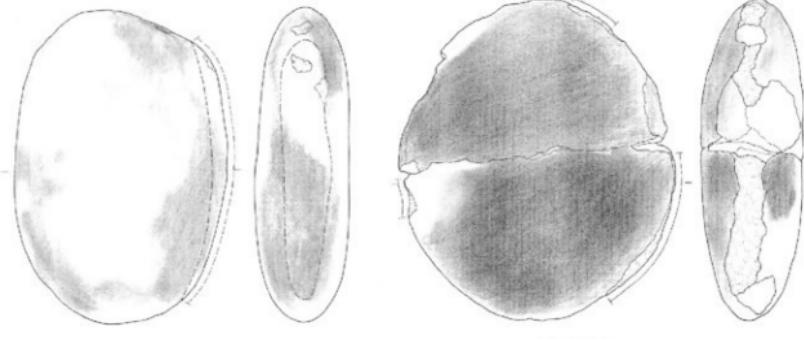
石7



第18図 石製品実測図1 (S=1/3)

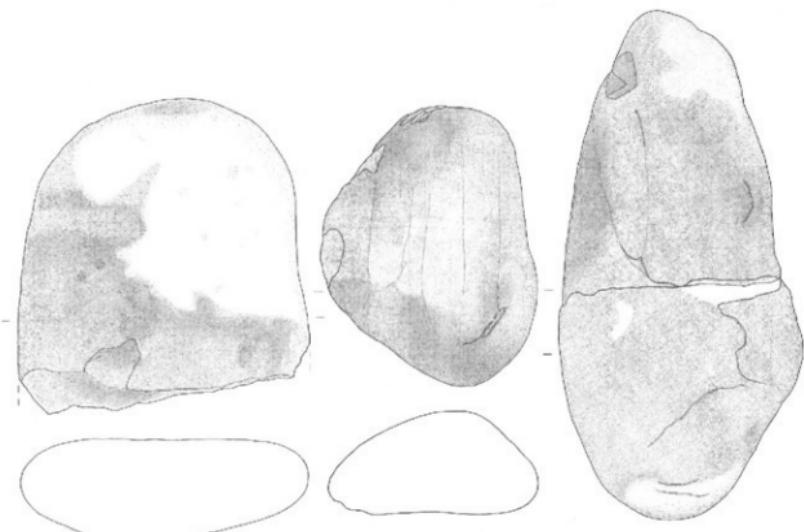


第19図 石製品実測図2 (S=1/3)



石9

石11



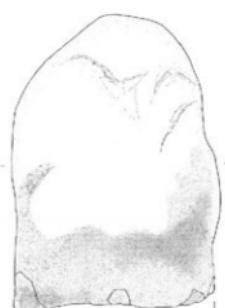
石10

石12

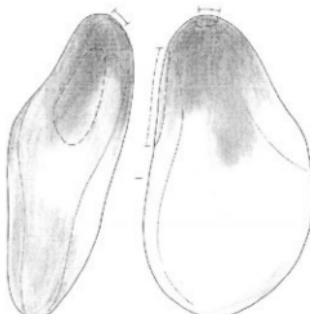
石13



第20図 石製品実測図3 (S=1/3)



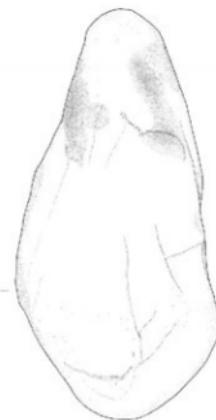
石14



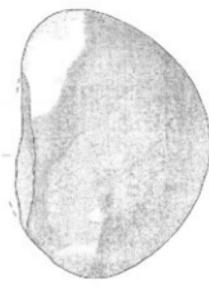
石15



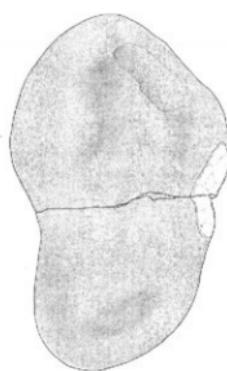
石16



石17



石18



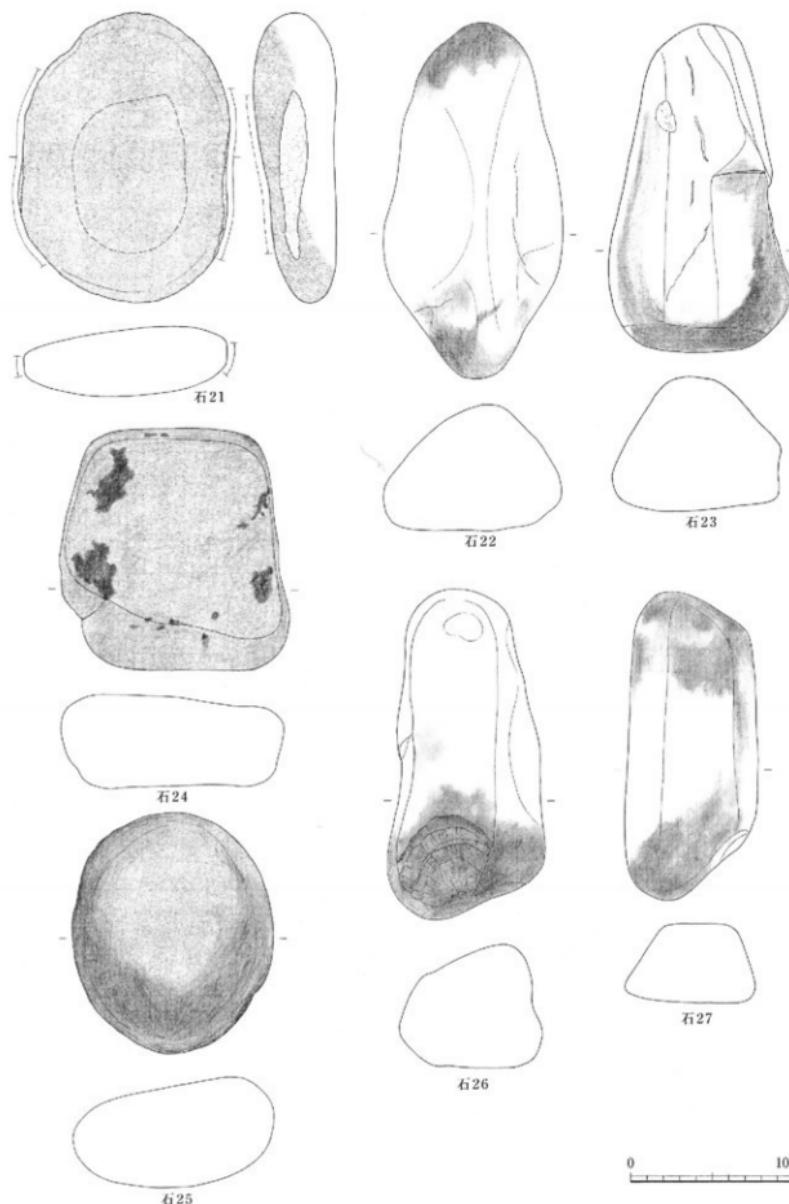
石19



石20



第21図 石製品実測図4 (S=1/3)



第22図 石製品実測図5 (S=1/3)

第2表 土器・陶器觀察表

番号	グリッド	種類	口径 器種	器高 (cm)	底径 (cm)	色調 (内)	調整 (内)	残存率	備考	尖面 番号
	遺構									
1	B12 ~ D9			(26.0)		にぶい黄橙		小片 1/15	条痕	6
2	包含層	深鉢								60
	C9	須恵器			(9.4)	灰				
	SI17	杯				灰				
3	C10	須恵器	1.8					つまみ部 全周	口徑はつまみ部分	19
	SI15	壺								
4	C8	須恵器	6.8	(6.1)				全体 3/4	外面に自然釉付着	4
	P5	短頸壺								
5	C10	土師器	7.7	2.0	4.0	にぶい橙	ナデ			15
	SI13	皿				にぶい橙	ナデ			
6	D10	土師器	7.8	1.7	5.0	にぶい黄橙	ナデ			29
	SI13	皿				にぶい黄橙	ナデ			
7	C10	土師器	7.8	1.3	4.5	にぶい橙	ナデ		全体 2/3	赤色較あり
	SI13	皿				にぶい橙	ナデ			14
8	C10	土師器	7.8	1.1	5.2	にぶい橙	ナデ		全体 1/5	
	SI13	皿				にぶい橙	ナデ			16
9	C10	土師器	(8.0)	1.4	(5.0)	にぶい橙	ナデ		小片 1/9	
	SI13	皿				にぶい橙	ナデ			18
10	C10	土師器	7.7	1.8	4.7	浅黄橙	ナデ			55
	SI14	皿				浅黄橙	ナデ			
11	C10	土師器	7.3	1.0	5.8	にぶい橙	ナデ		全体 1/6	
	SD3	皿				にぶい橙	ナデ			3
12	D9	土師器	7.3	1.6	4.3	浅黄橙	ナデ		全体 3/4	海綿骨針あり 内面に煤付着
	P3	皿				浅黄橙	ナデ			9
13	D10	土師器	(10.7)	2.7	6.1	浅黄橙	ナデ		刷部 1/4	
	SI13	皿				浅黄橙	ナデ			27
14	D10	土師器	(10.7)	1.6		浅黄橙	ナデ			
	SI13	皿				浅黄橙	ナデ			28
15	C10	土師器	(11.4)	1.7		にぶい橙	ナデ		全体 1/9	
	SI13	皿				にぶい橙	ナデ			17
16	C10	土師器	11.0	3.6	6.7	浅黄橙	ナデ			56
	SI14	皿				浅黄橙	ナデ			
17	C8	土師器	10.5	1.7	(7.2)	にぶい橙	ナデ		小片 1/14	
	SK16	皿				にぶい橙	ナデ			5
18	B11	土師器	12.8	1.8		にぶい黄橙			小片 1/13	
	P1	皿				にぶい黄橙				2
19	C9	珠洲焼			9.5	灰				
	SI17	壺				灰				11
20	D9	珠洲焼	(28.4)			灰	ヨコナデ			46
	SI19	擂鉢				灰	ヨコナデ			
21	C9	珠洲焼				灰				
	SI17	擂鉢				灰				61
22	D9	珠洲焼			12.7	灰				
	SI19	擂鉢				灰				47
23	B11				9.5	灰黃				
	SI2	壺				灰黃				7
24	C10	瀬戸美濃			4.5	オリーブ黄				
	SI14	灰釉碗				灰白	ケズリ			57
25	D9	加賀焼			15.3	にぶい橙				
	SI19	壺				灰黃	ナデ			45
26	B8	瀬戸美濃			7.4	灰黃				
	P4	おろし皿				灰黃				
27	D9	瓦器	47.4			浅黄橙	ナデ		全体 1/12	
	SI19	火鉢				灰				48

第3表 鉄製品観察表

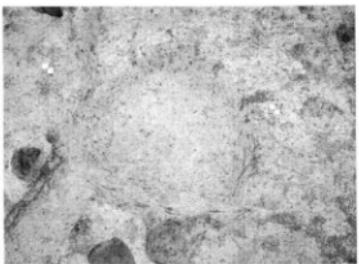
番号	グリッド 直標	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	質量 (g)	備 考	実測 番号
1	B10	釘	4.5	1.2	4		21
	SI6						
2	C10	釘	4.3	1.6	6		20
	SI15						
3	C10	鉄滓	6.8	5.3	120		13
	SI16						

第4表 石製品観察表

番号	グリッド 直標	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	質量 (g)	石材	備 考	実測 番号
1	C10	行火					凝灰岩		12
	SI11								
2	C10	行火	14.7	(11.8)	(6.0)		凝灰岩		58
	SI14								
3	C10	行火	(12.1)	(10.1)	(4.3)				59
	SI14								
4	D9	行火	(11.2)	(11.3)	15.3		凝灰岩		34
	SI19								
5	B9	行火	(5.4)	(8.8)	(6.3)		凝灰岩		32
	SK11								
6	C9	炉縁石	(15.3)	(10.7)		(1,100)		煤付着	23
	SI17								
7	D9	砥石	20.0	11.9	6.2	2,300			43
	SI19								
8	B9	炉縁石	51.5	13.0	13.6	6,070		煤付着	31
	SK11								
9	C9	砥石	18.5	12.9	5.8	2,250		煤付着	33
	SE1								
10	B10	自然石	(19.4)	17.8		(3,290)		煤付着	30
	SI10								
11	C9	自然石	19.8	16.9	6.1	(2,450)		煤付着	26
	SI17								
12	C9	砥石	17.4	13.1		1,820		煤付着	25
	SI17								
13	C9	自然石	31.4	14.9		5,950		煤付着	22
	SI17								
14	C9	自然石	(18.4)	12.7		(2,800)		煤付着	24
	SI17								
15	D9	砥石	18.7	10.2	6.9	1,600		煤付着	41
	SI19								
16	D9	自然石	22.0	11.2		(2,290)		煤付着	52
	SI19								
17	D9	自然石	25.3	12.6		3,810		煤付着	54
	SI19								
18	D9	自然石	16.5	11.8		(1,685)		煤付着	53
	SI19								
19	D9	砥石	10.7	9.8		(565)		煤付着	51
	SI19								
20	D9	自然石	22.0	13.3		2,520		煤付着	49
	SI19								
21	C10	砥石	18.0	12.8	5.1	1,530		煤付着	41
	SK8								
22	C10	自然石	21.9	11.0	7.8	2,550		煤付着	37
	SK8								
23	C10	自然石	20.2	11.3	8.6	2,750		煤付着	35
	SK8								
24	C10	自然石	15.0	13.7	6.2	2,300		煤付着	39
	SK8								
25	C10	自然石	14.8	12.4	6.4	1,690		煤付着	42
	SK8								
26	C10	自然石	20.3	9.6	7.6	2,150		煤付着	38
	SK8								
27	C10	自然石	19.0	8.1	4.9	1,450		煤付着	36
	SK8								



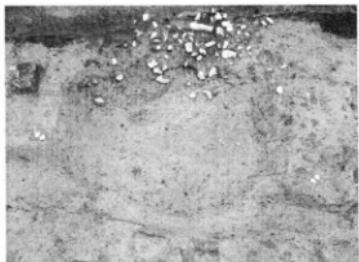
S B 1、2 (西から)



S I 2 (北から)



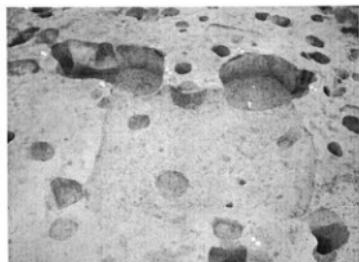
S B 3 (東から)



S I 3 (東から)



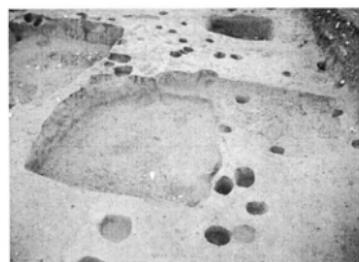
S B 4、S D 5~7 (北から)



S I 4 (南から)



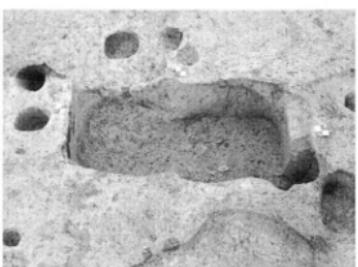
S I 1 (北から)



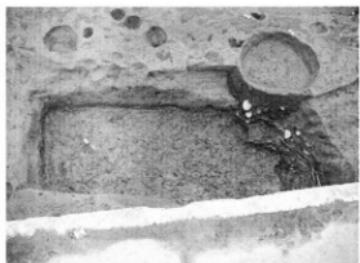
S I 5、6 (北から)



S I 14~16 (南から)



SK 5 (北から)



S I 17, SE 1, SK 14 (南から)



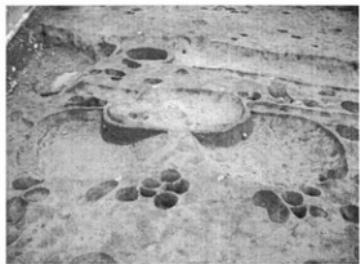
SK 7 (北西から)



S I 18, 19, SD 4 (東から)



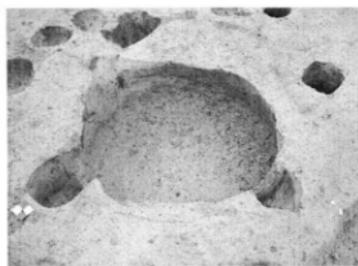
SK 8 (南から)



S I 20, 21, SK 15 (西から)



SK 9 (北から)



S K 1 0 (南西から)



S E 2 (南から)



S K 1 1 (西から)



S D 1 (南から)



S K 1 1 灰綠石 (北から)



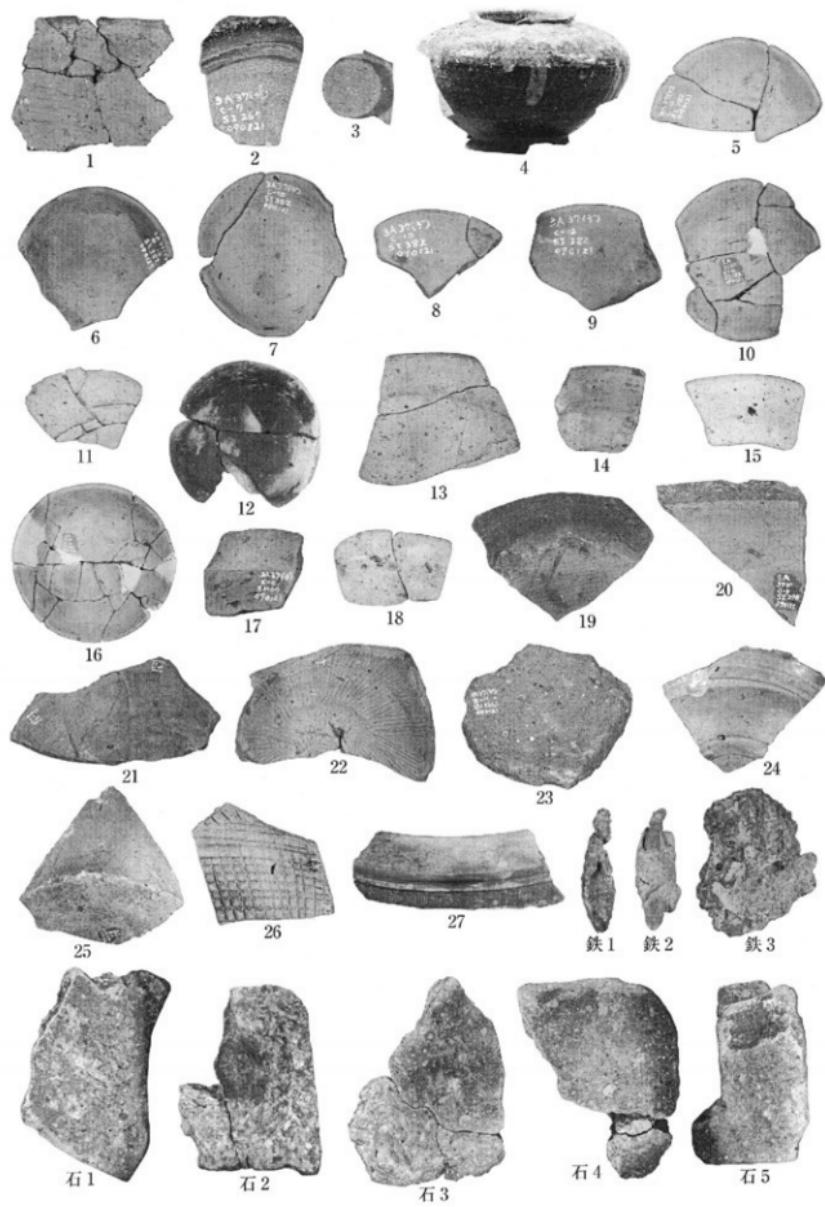
P i t 3 (東から)

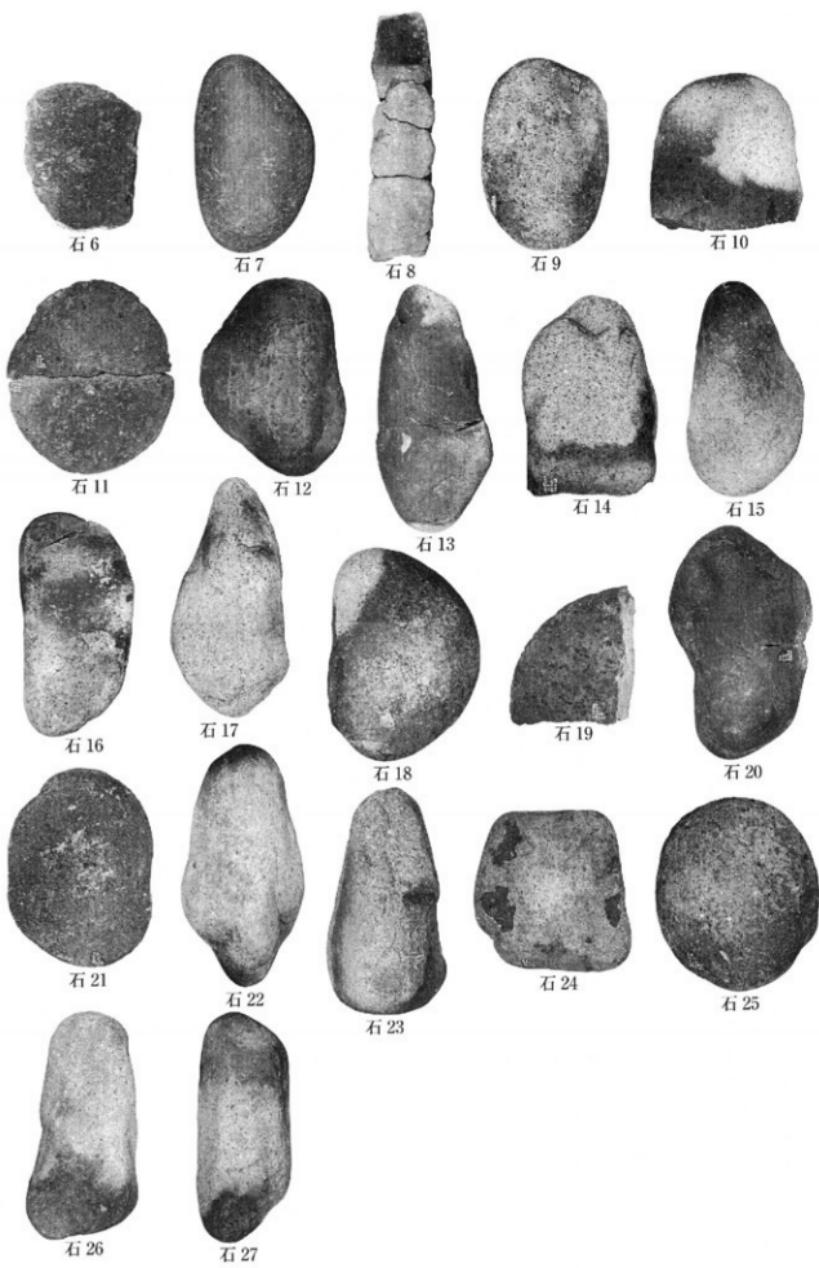


S K 1 2 (南から)



P i t 5 (南から)





## 報告書抄録

ふりがな 書名 副書名	みっかいち Aいせき 三日市A遺跡1							
シリーズ名	野々市町北西部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	3							
編著者名	田村 昌宏							
編集機関	野々市町教育委員会							
所在地	〒921-8510 石川県石川郡野々市町字三納18街区1番 TEL076-227-6122							
発行年月日	西暦 2011年3月30日							
所取遺跡名	ふりがな 所在地	ふりがな 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
みっかいち 三日市A遺跡	いしかわけんいしかわぐん 石川県石川郡 のいちまち 野々市町 みっかいちまち 三日市町	17344		36° 32' 9"	136° 35' 49"	20081126 ~ 20090123	660m <sup>2</sup>	記録 保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三日市A遺跡	集落	縄文時代 古代 中世	堅穴状遺構、 掘立柱建物 井戸、土坑、溝、	縄文土器、須恵器、 中世土器、 中世陶磁器、瓦質土器、 行火、炉縁石				
要約	縄文時代は、遺物の出土のみである。 古代は、1基のピットから、完形に近い短頸壺が見つかった。調査区周囲で、集落跡を確認しており、それに関係すると考えられる。 中世は、14世紀後半～15世紀前半の集落跡を確認した。集落は、溝によって区画され、その内で宅地化が図られている。宅地内には、堅穴状遺構、掘立柱建物、土坑、井戸などの遺構が見られた。これら生活に密着した遺構と別の箇所では、耕作地と想定される遺構も確認した。調査区内には居住域と生産域の両空間が内在し、居住域内の堅穴状遺構と掘立柱建物などは、設置箇所が決まっていたようである。このように、中世集落は、計画的な土地利用がなされる中で、設営されていたようである。							

---

---

野々市町北西部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書3

## 三日市A遺跡1

発行日 2011年3月30日

発行者 野々市町教育委員会

〒921-8510

石川県石川郡野々市町字三納18街区1

電話 076-227-6122

bunka@town.nonoichi.lg.jp

印 刷 高桑美術印刷株式会社

〒921-8822

石川県石川郡野々市町矢作3丁目18

---

---

# 三日市A遺跡1 遺構平面図

+50.790

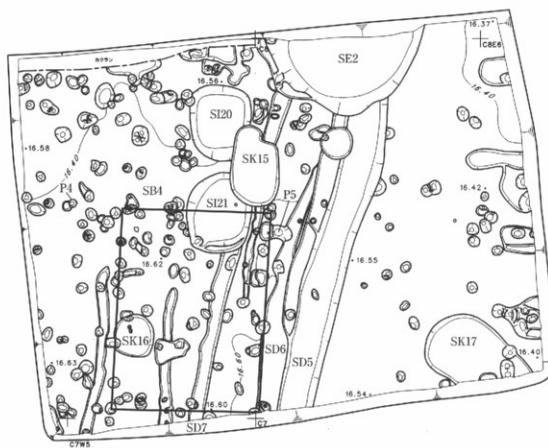
+50.780

+50.770

+50.760



平成20年度 調査区



0 10m  
(S=1/100)

+50.790

+50.780

+50.770

+50.760

